

劇団シアターホリック第26回本公演作品

「幸福論」

松島寛和

登場人物

- 岡田こなつ 43歳 三姉妹の長女。10年前に夫と死別した。
岡田ゆうみ 17歳 こなつの娘。高校三年生。
片岡みはる 39歳 三姉妹の次女。パート勤務の兼業主婦。
片岡大輔 46歳 みはるの夫。
高橋あきほ 36歳 三姉妹の三女。独身。ウェブデザイナー。
吉村明日香 26歳 あきほの同僚。

場面

高知市、及び高知県の町仁淀川河畔。

^^行頭に ※ のマークがある台詞は、言葉の向きを客席へ向けて演じることVV

仁淀川河畔

あきほが登場。

アウトドアな服装。

あきほ

※高知市からの町の市街地を抜けると、すぐに仁淀川が見えてきます。

そのあたりはもう河口に近いので、川幅が広くて、流れは穏やかです。

天気の良い日には、川岸まで車を乗り入れて川遊びをしている人たちや

テントを張ってバーベキューをしたり、カヌーで川下りをしている風景をよく目にします。

その仁淀川沿いを30分くらい走ると、私の実家があります。

実家の周りには、なーんにもありません。

あるのは、ただ、仁淀川と、川向こうに見える山、森……一面の緑。それだけ。

仁淀川は、どんな川かというと……ずっとここで育ってきた私にとって、

何の変哲もない普通の川なんで説明が難しいんですが。

なんか、観光協会的なところが必死で売り出しているのを見ると、そこそこ綺麗な川らしいです。

前に県外の人と喋ってる時、海水浴とか言って海で普通に泳ぐという話を聞きました。

わたしたち高知市界隈の人たちは、普通、川で泳ぎます。

子供の頃はよく、お姉ちゃんたちと、近所の友達と、一日中川で遊びました。

明日香がいる。

彼女もアウトドアな出で立ち。

明日香

……来ちゃいましたね。

あきほ

どう？ 気に入った？

明日香

気に入ったー。

あきほ ここは一般のキャンパーが入ってこないから、騒がしくなくていいよ。

明日香 じゃ、独り占めだ。この景色。すごい。あきほさんちってここからすぐながですよね。

あきほ すぐって、そこよ、そこ。歩いて数十秒。

明日香 へー。

あきほ なんかね、今夜はここでバーベキューするってよ。

明日香 マジっすか。それ、最高じゃないですか。うわー楽しみ。

あきほ (明日香のはしゃぎっぷりをみてちよっと笑う)

明日香 あきほさんって、いつまでここにおったがですか？

あきほ 就職するまでいたよ。田舎もんよ田舎もん。

明日香 田舎もんはあたしだって同じですよ。

あきほ 明日香は市内でしょ、ずっと。あたしはここから通ったから。高校も大学も。

明日香 どうやって通ったがです？ チャリで？

あきほ チャリなわけじゃないじゃん。バカじゃないの？

明日香 ですよー。

あきほ お母さんが送り迎えしてくれてね。姉さんもね、市内に勤めてたし。大学生になったら、お古の軽自動車をお下がりでもらってね。

明日香 車持ちっちな大学生って。やるー。

あきほ すんごいポロポロのちっちゃい車だったな。まあそれでも十分だよな。この辺に住んだら車は必需品だからなあ。

明日香 あきほさんのお姉さんってどおゆう人ながです？

あきほ そうだねえ。一番上の姉は、ちよっと冷たい感じするかな。

明日香 えー。冷たいが？

あきほ だから、ちよっと感じ悪くてもあんま気にしないで。それがベースだから。

明日香 大丈夫やろか。

あきほ 真ん中の姉はね、能天気。

明日香 能天気っすか。

あきほ そ。

明日香 じゃ、あきほさんは、それを足して割った感じかもしれないですね。

あきほ どういう意味よ。
明日香 感じの悪い脳天気。
あきほ なにそれ。最悪じゃん。

こなつ 登場
エプロン姿

こなつ いらっしやい。

あきほ わー。来た。

こなつ 車の音が聞こえたからさ。きつとここだと思って。

あきほ 耳がいいな、相変わらず。

明日香 あ、あの。あたし、あきほさんと仲良くさせてもらいゆ、吉村明日香です。

こなつ (明日香に) どうも。はじめまして。あきほの姉のこなつです。

明日香 はじめまして。よろしくおねがいます。

あきほ こなつちゃん。明日香がね、ここ、すごい気に入ったって。

明日香 (照れて) もう、あきほさん！

こなつ あ、そう？ あたしはずっとここにおるからあんまりわからんけど、都会からきた人はそんなこと言うかもしれんね。

明日香 いや、あたし全然高知の人ですけど……ここいいですよ。

こなつ でも高知やつたらねえ。このくらいの田舎は珍しくないよ。

明日香 珍しいですよ。あたし、たまにキャンプ行くんですけど。だいたいどこ行っても人がたくさんおるがですよ。ここは誰っちゃおらんき。
最高じゃないですか。

こなつ そつかー。人がおらんがええがか。なーんか、そんなんほめられてもピンと来んがよね。こんななんもないとこ。

明日香 それがいいんですよ。なんもないのが。

こなつ ふうん。(あきほに) よかったじゃん。

あきほ 別によかねえよ。

こなつ 今日はね、ここでチキンをまるっと焼いちゃうから。

明日香 まるっと。

こなつ まるっとね。焼いたチキンを手作りのハニーマスタードソースで食べるとおいしいよ。

明日香 うわー。なにそれー。すごそうー。

あきほ ねえ、今日ってみはるちゃんも誘ってんの？

こなつ ああ、一応ね。

明日香 みはるさんって、真ん中のお姉さんですか？

こなつ うん。でも来るかどうか微妙な感じだったんだよね。なんか、どっか出ちゆうみたいやった。

あきほ タイミング悪っ。チキンのまるっと焼きなんて滅多に食べられないのにな。

こなつ ほんとだよねー。せっかく明日香さん来てくれちゆうがやに。

明日香 いえ、全然。あたしのは気にせんとってください。きつとまた機会ありますし。

あきほ でもゆうみはいるんでしょ。(明日香に) 姪っ子。お姉ちゃんの娘。

明日香 ゆうみちゃん。

こなつ いるいる。なんか、あんたちが来るからってはいじゃってさ。シフォンケーキなんか焼いてるよあの子。

あきほ シフォンケーキで！ そんなん焼くような子だっけ。

こなつ いやいや、焼かない焼かない。したことないよそんなん。なんかご近所からいただいたハーブつかってね。けったいなもん作りゆうわ。

あきほ へー。食えんの、それ。

明日香 なんてこというんですか。食べれますよ。

あきほ さあどうかな。明日香はゆうみをまだ知らないからな。思ったよりすごいの出てきたらどうする？ 食べる？ それでも。

明日香 ……食べます。

あきほ ようし。じゃ、偵察するか。ちょっとゆうみをからかってこよう。

明日香 はい。

こなつ あー。よかったら、明日香さん置いてってよ。手伝ってほしいんだけど。バーベキューの準備。

あきほ え。なんでよ。

こなつ だって一人でテーブル運ぶの大変ながやもん。

あきほ そんなん知らんがな。

こなつ (明日香に) いいよね？

明日香 え、ああ、はい。いいですよ。

あきほ えー。なにそれ。

こなつ じゃ、あたしと明日香さんで準備はじめるから。あんたはゆうみんとこ行って、思う存分からかってきなさいよ。

あきほ なんじゃそりゃ。

明日香 思う存分からかってきなさい。

あきほ なんて明日香までそんなこと言うんだ。

こなつ ほらほら、ゆうみんとこ行ってあげて。

あきほ うーん。じゃ、ゆうみもこっちに連れてくるか。おねえちゃん、あまり明日香をいじめないでよ。

こなつ いじめんよ。何と思いううがな。

あきほ、去る。

明日香 お姉さんの言葉に乗ってしまいました。

こなつ 乗ったね。

明日香 あきほさん怒りやせんですかね。

こなつ 大丈夫大丈夫、こんなことで怒りやせんよ。つつかさ、あきほってほんと可愛げがないね。あんなのと仲良くしてくれてありがとね。

明日香 いえ、私の方がありがとです。

こなつ じゃ（椅子を手渡して）これお願いね。

明日香 はい。

ふたり、キャンプ用の椅子を出してくる。

明日香 でも、すごいですね。道具が一式揃ってる。さすがだなあ。

こなつ こんな田舎はね、バーベキューしたり、河原でコーヒー飲んだりするしか娯楽がないがよ。

明日香 あーそれ、あきほさんも言っていました。

こなつ 明日香さん、キャンプ行くがよね。

明日香 あ、はい。そんなに頻繁にはいかんがですけどね、たまに。

こなつ どんどこ行きゆうが？

明日香 あ、でも、仁淀川結構行きますよ。この奥の方とか。あと、なんか越知の向こうの方とか。

こなつ 越知の方って、なんかあるがよね、なんか。

明日香 なんか？

こなつ なんか、大きい企業がお店出しちゆうって。

明日香 スノーピーク、ですかね。

こなつ そう、だっけ。流行っちゆうがよね、いま、キャンプ。なんか、早明浦ダムの近くにもあるみたいな話聞いたけど。

明日香 早明浦ダムの近くですか？

こなつ そう、そのスノーなんちゃら、みたいなやつ？

明日香 いや、そっちにはないがやないろか。

こなつ そうだっけ？ なんかあるって誰かが話ししよったような。

明日香 もしかしたら、そっちは、モンベルかも……。

こなつ モンベルか。へー。

明日香 お姉さんは、キャンプは……。

こなつ あんまり知らないかな。

明日香 ですよねー。

こなつ でも、いいね。キャンプ、みんなで行くがは楽しそう。

明日香 あ、あたし、基本的に、一人です。

こなつ え。

明日香 あんま友達いないんで……。

こなつ へー、一人で。見かけによらずたくましいがやね。ソロキャンプか。流行っちゆうがやろ、今。

明日香 みたいですね。

こなつ 一人じゃなきゃいやなが？

明日香 いや、別に一人じゃなきゃってわけでもないですけど。

こなつ 誘ったらええやん、あきほ。

明日香 ああ、でも、あきほさん、あんま乗ってこないから。

こなつ まあ、そっか。あの子はそうだな。

明日香 だから、あたし、キャンプは別に一人でもええがです。

こなつ でもキャンプいいかもね。そういや真ん中の妹が前にちよつと始めようとしてたことがあったな。

明日香 そうながですか？

こなつ あたしたちにからかわれてやめちゃったけどね。あの子んところは旦那が引きこもりがちだから、あのままキャンプ行ったらみはるも

ソロだったかも。

明日香 そうなんですか。

こなつ よかったら誘ってあげてよ。ソロキャンプ。

明日香 いいですね。二人でソロキャンプかあ。楽しそう。

こなつ 二人でソロキャンプ。遠目に見てみたいね。その景色。

みはるの家

みはる。

みはる ※今日は妹が実家に友達を連れてくるというので、あたしにも誘いの電話がありました。

晩に河原でバーベキューをするからって。

(時計を見て)そろそろ家を出ないといけなかなーって思ってたんですが
ついついぼんやりしてしまっただ。

実家に、みんなが集まりかけてる時、

あたしは、自分の家で、ほうじ茶を飲んでました。

(ほうじ茶を飲んでいる)

あたし、ほうじ茶が好きなんです。

(ほうじ茶をすすする)

たかがほうじ茶、されどほうじ茶。

(ほうじ茶をすすする)

はー(とため息)

なぜあたしが今、ここで、焦りもせず

ただぼんやりとほうじ茶を飲んでいるかということの説明するためには、
時間を何ヶ月か戻さなくてはなりません。

ごくごく普通の平日の夜、自分の家で。

その時、夫はソファに寝転んで、スマホのゲームをしていました。

あたしはお風呂から上がって、足の爪を切っているところでした。

大輔は独白の間に登場し、ソファに寝転んでいる。

みはる ねえ。

大輔 んん。

みはる 取ってくれた？ 休み。

大輔 ん？

みはる 休み。

大輔 んー。

みはる んーじゃなくてさ。

大輔 ああ、うん。

みはる (ちよっと笑う)

みはる、爪を切り終わって片付ける。

みはる もう来月だからさ。会社に言っといてよ。

大輔 うん。

会話をしながらみはるはお茶を入れて飲んでいる。

大輔 このさあ、スマホのゲームをやっている時間ほど無駄な時間ってないよね。

みはる やめればいいじゃん。

大輔 そうなんだよ。(やめない)

みはる お茶、いる？

大輔 いない。

みはる ああ、そう。

みはる、一人でお茶をすすする。

みはる ねえ、別府がいいかな。それとも由布院かな。

大輔 え？

みはる 温泉よ、温泉。ほら、ついでに寄ろうって言った。

大輔 ああ。

みはる そんなに離れてないのよ、別府と由布院。やっぱり由布院かな。

大輔 そうねえ。

みはる 別府ってね、世界一なんだって。

大輔 ふうん。

みはる ふうんって、ねえ、聞いている？ 私の話。

大輔 聞いているよ。聞いてます。

みはる 別府はね、お湯の量と種類が世界一なんだって。だから別府って一言で言っても、どこに行くかで温泉の質が変わるのよ。ねえ、聞いている？

大輔 聞いているって。すごいじゃん。

みはる (スマホを開いて) 宿はさあ、だいたい目星つけてるんだよね。ちょっと待ってよ…(旅行サイトを探している) うーんと、これこれ。ちょっとみて。(大輔の横に座ってスマホを見せる) ほら、ここ。アルカリ泉で美肌効果抜群だって。晩ご飯の季節の懐石、これよくな

大輔 (ちらっとしか見ない) ああ、うん。

みはる それか、これ、えっと(サイトを探して) これ。離れを貸切にできるんだって。部屋に露天風呂がついてるの。これどう。

大輔 (見もしない) うん。

みはる ……早めに会社に言ってるね。言いそびれて休めなくなるとか嫌だから。

大輔 うん、あのさ、それだけだよ。…ごめん、おれ、ちょっと、じつはさ、温泉はどうかと思ってるんだよね。

みはる え。

大輔 だっぴいま、やっぱり、旅行はまずくない？ コロナだから。

みはる えー。

大輔 だからさ。ほんと、今になって悪いけど。やめとこう。箱根は。

みはる ……別府だよ。

大輔 え？ 別府？

みはる 別府だよ。箱根と間違わないでよ。別府と箱根じゃ全然違うよ。

大輔 ……せっかくいろいろ調べてもらってさ、本当に申し訳ないけど、別府はやめましょう。

みはる えー。だって、去年から楽しみにしてたじゃん。大輔も楽しみって言ってたじゃん。

大輔 それはだって、みはるさんが楽しそうにしてたからさ。

みはる え、うそ。じゃ、あたしに合わせてたってこと？

大輔 合わせてたっていうか、だってぼく、温泉とかよくわかんないし。

みはる 温泉がよくわかんないってどういう意味よ。

大輔 どういう意味って、まあ、そのままの意味だけど。

みはる 温泉よくわかんないのに、嘘をついてたのしそうなふりをしてたってこと？

大輔 いや、嘘とかそんな大袈裟な話じゃなくて。あのときはそれなりに楽しそうだなとおもってたんだよ。

みはる じゃ、いいじゃん、行こうよ。

大輔 うーん。

みはる やつと計画したのに。この機会を逃したらもう機会なんてないよ。ねえ。

大輔 うーん……でも、温泉はなあ。ごめん。

みはる ……わかった。

みはる、お茶をすすす。

みはる お茶、いる？

大輔 あ、いい。

みはる あのさあ。

大輔 なに？

みはる もしかして、会社でなんか言われた？

大輔 何が？

みはる 旅行行くとか。

大輔 なんですか？

みはる あ、いや。大輔にしては、はっきりと断ったなあと思って。

大輔 ぼくだって断ることはあるよ。

みはる そう？

大輔 会社からはなにも言われてない。だって、まだ言っていないもん。

みはる そっか。

大輔 だって、正直、今の時期、温泉行くから休むとはちょっと言いにくいよね。

みはる ……。

大輔 みはるさんも言いにくいでしょ、お土産話があったとしても。だからやっぱ、今はやめといたほうがいいよ。ツイッターとかインスタにもあげづらいじゃん。

みはる まあ、別に、インスタに上げるために旅行に行くわけじゃないけど。

大輔 だけどさ、誰にも言えないってのも寂しいじゃん。だって、内緒にしとかなきやいけないんだよ。寂しいでしょ。

みはる ……内緒にしなきやいけないのかな。

大輔 だって、言える？ 堂々と。

みはる ……うーん。(疑問)

大輔 今はみんな我慢してるんだから。

みはる ……うーん。(無理に納得)

※大輔が温泉に興味がなかったってこと。まあまあ、ショックでした。

あきほ ※吉村明日香は会社の同僚でした。

私はウェブデザイナーの仕事をしていた、彼女はそれとはちょっと違う部署にいて、だからあまり一緒に仕事をするとはなかったのですが。

大きな案件がありまして、私たちはそこで初めてチームになってお仕事をしました。がっちり組んでやりましたから、その時にちょっとだけ仲良くなって。

いや、実際、あたし、職場でプライベートなことほとんど話さないんです。

だから、個人的な付き合いをする人って、これまで誰もいなかったんですけど、なんか、たまたま明日香とはラインを交換して。

それで、この案件が終わったとき。

ま、時世柄、集まって打ち上げはよくないだろうということで全体の打ち上げはやらなかったんですが。明日香から、二人で打ち上げやりませんか？ と誘われたんです。

女子会と言うにはあまりにも垢抜けない、ごく普通の居酒屋でした。

明日香 すいませーん。あたし、この、梅酒のソーダ割りと……先輩何飲みます？

あきほ あ、あたしビールで。

明日香 じゃ、生を。お願いしまーす。

先輩、ずっとビールながですわね。

あきほ あ、うん。あたしビール好き。

明日香 すごいなー。あたし、ビール飲めないです。

あきほ なんです。苦いのか。

明日香 そうですー。ビール飲める人って、大人って感じ。

あきほ 大人じゃないよ、そんなん。

明日香 えー。大人ですよ。

あきほ じゃ、吉村さんは普段どんなの飲むの？

明日香 あたし？ サワーとかかな。

あきほ サワーかー。でも、そのうちビールの味を覚えるかもよ。

明日香 そうですかね。大人になれますかね。

あきほ 吉村さんっていくつなんだっけ。

明日香 あたしですか？ 26になりました。

あきほ まだ若いじゃん。そっか、じゃ、会社入ってまだ3、4年か？

明日香 はい。そうなんです。あたしも早く、先輩みたいにバリバリ働けるようになりたいです。

あきほ あたし？ 全然バリバリなんかしてないよ。

明日香 そうですか？ あたし、先輩すごいなって、ずっと見てましたよ。

あきほ すごいって何が。

明日香 だって、ほとんど残業しないじゃないですか。業務時間中は全然私語もなくて、ずっと集中して仕事して、そんで、時間になったらさくつと終わらせてスパッと帰る。すごいですよ。

あきほ 変なところ褒められてるなあ。

明日香 変じゃないですって。あたし、要領悪いき、仕事がうまく片付かんがですよ。先輩みたいに集中できたら、きつともっと早く帰れるがやろうなっていつも思いゆうがです。

あきほ あ、そう。

明日香 先輩、あたしと一緒にお仕事してくれてありがとうございました。

あきほ ……あんた、酔ってる？

明日香 ちよつとだけ。

あきほ ちよつとだけって。おまえ、弱いな、さては。

明日香 えへへ。

あきほ あ、そうだ。

明日香 なんですか。

あきほ 吉村さん、鬼太郎好きでしょ。

明日香 え。なんですか。それは、あたしのスマホの待ち受けが鬼太郎だからですか。

あきほ そうそう。仕事中、チラッと見えてさ。

明日香 先輩も好きながです？

あきほ (鬼太郎柄の手拭いを取り出して見せる) ほら。

明日香 うわー。なにこれー。

あきほ あたしもね、嫌いじゃないんだよね。

明日香 なんながー、やったらもつと早う言うたらええやないですか。水臭い。

あきほ だって、仕事中だからね、一応は。

明日香 真面目だなー先輩は。

あきほ これね、境港で買ったんだ。

明日香 ですよ！ あたし、見たもん、水木しげるロードのお店でこれ。

あきほ え。吉村さんも行ったことあるんだ。

明日香 ありますよ！ あたし、鬼太郎も好きだけど、本当は水木先生が好きながです。

あきほ へー。

明日香 あの、あそこ行きました？ のんのんばあのお寺。

あきほ 行ったよ！ 写真がある。ちよつと待って。(スマホをいじりながら) あれだよ、地獄の絵が飾ってあるところ。

明日香 そうですそうです。

あきほ えーつとね、えーつと、ほら、あった。見て。(スマホを見せて) 水木先生の銅像と並んで写真撮ってるの。これ、お寺の人に撮っても

らったんだよ、わざわざ。

明日香 えー！ ちよつと待ってください。(スマホをいじって) ほら見て。

あきほ (スマホを覗いて) うわ。なにこれ。あんた、あたしと同じ写真撮ってんじゃないん……。

明日香 すごくないですか、これ。あたしも先輩も、同じところで同じポーズで写真撮っちゃう。こんなことってあるがですね。

あきほ 気持ち悪い。

明日香 なんですすか！ 気持ち悪くないですよ！

あきほ つか、そんなに好きなんだ、水木しげる。

明日香 好きですわー。

あきほ 何が一番好き？ 水木しげる作品で。

明日香 総員玉碎せよ、が好きですねー。
あきほ うわー。

※ちなみに、「総員玉碎せよ」とは、水木しげる作品でありながら妖怪などは登場せず、ただただ悲惨な戦争体験が綴られていて、最後に全員が死ぬという身も蓋もない話です。……この子変わってるわー。

明日香 なんですか？

あきほ いや……。

明日香 先輩、あたし、なんか嬉しいです。こんな、水木しげるの話ができる人と会ったことないし。写真、マジですごくくないですか？

あきほ あ、まあねえ。

明日香 また飲みに関連ってってくださいよ。もっとあたし、先輩と話がしたいです。

みはる ※それで、今度はあたしの勤め先でのことなんですけど。

お昼休み、休憩室で。テーブルの上に、お菓子の差し入れが置いてありました。

(箱を見る) ……面白い恋人。

あたしは一瞬、「うん？」と思いました。

みはる あれ？ これ、誰から？

同僚 あーそれ、山中さんからの差し入れみたいですよー

みはる へー。一枚いただいちゃお。

(開けて食べる) あー、おいしい。

なに、山中さん、大阪行ってたんですか？

山中 そうなのー。この土日ねー。

みはる ご家族の用事か何か？

山中 用事っていうかーただ遊びにー。

みはる へー……。遊びに……。

やっぱあれですか、多かったですか、人。

山中 多かったよー。もうすごい。さすが都会って感じ。

みはる へー、やっぱ都会はそうですよねー。人多いですよねー。

それで、何食べました？

山中 お好み焼き食べたよー、すごいおいしかったー。

みはる へー。お好み焼きねー。あたしも大阪で食べたことあるけど、普通だったな。

山中 美味しいお店あるよー。教えてあげるよー。でもすごい並ぶー。

みはる どのくらい並ぶんですか？

山中 1時間くらいー。

みはる めちゃめちゃ並ぶじゃないですか。それ、並んだんですか。

山中 並んだー。1時間。なんか雑居ビルの廊下でー。

みはる うわー。あたし、お好み焼きに1時間も並べないかも。へー。

みはる ※ここであたし、ちよつとだけ意地悪なことを言いました。

みはる でも、あれじゃないですか？ 今こんな時期に大阪なんて行ったら、近所の人とかに嫌がられたりしません？

山中 えー、なんで？

みはる なんてって、ほら、あれじゃないですか。県外っていうか、四国から出て、そんな都会に行ったら、ねえ。
ねえ。やっぱり。

山中 えー。コロナー？ そんなことないよー。

みはる そうですか？ それって山中さんが気がついてないだけじゃないですか？

山中 そうかなー。

みはる だって、よく聞きますよ。うわさ。

山中 なんか県外ナンバーの車を見たら石を投げる人がいるとか。

山中 えー。ひどーい。

みはる そうそう、確かにひどいですけどね。

でも、あたし、ちよつとだけ気持ちわかるなー。

だって、うつされたらたまんないですもん。県外の人から。

山中 えー。

みはる いやいや、別に山中さんがうつすとか言ってるわけじゃないですよ。

山中さんはほら、普段から気を遣ってるじゃないですか。消毒とか。

そうじゃなくて、外からきた人の話ね。

信用できないじゃないですか、もしかしたらすごいいい加減な人って可能性もあるし。

山中 そんな人いるー？

みはる いや、いるんですよ、いい加減な人って結構。

山中 うちの近所のスーパーに出てる焼き鳥屋さんなんて、マスク一応してるけど、常に顎のところにありますからね。

みはる えー。ちょっとー。それやばーい。

でしよー。そんなの意味あんのかよ。みたいなね。

山中 そういうのはやっぱ、ちょっとねえ、ちゃんとして欲しいですよねえ。

みはる わかるー。

※ま、最終的には、何の話をしてるのかよくわかんなくなっちゃったんですけど。
この時、あたし、山中さんと話をしながら、心の中では「温泉より大阪の方が密じゃないのかよ！」ってずっと思っていました。

大輔に言ってやってくれ、大阪だって大丈夫なんだから、別府は平気だって。

いや、別にいいんです、山中さんがどこに行こうが。

山中さんを責めるつもりなんか全然ないんですけど。

でも、正直、都会の街中で1時間も行列並ぶのってアウトじゃないんですか？

あたしの温泉なんか、誰とも合わないって気を配ったら、本当に誰とも合わなくてもいけると思うんです。

そのために、由布院の、個室の、離れに温泉ひいてくれるようなところ、わざわざ探してきたわけだし。

山中さんが大阪でお好み焼き食べたりできるんなら、あたしの温泉くらい、いいんじゃないか、
そんな気持ちであたしは面白い恋人を2、3枚摘みつつ、その日は山中さんの話を聞いてたわけです。

あきほ ※ 初めて飲みに行ったあの日以降、何度か仕事のあとに彼女と飲みに行きました。

彼女は水木しげるのほか、お笑いも好きで、そこでもあたしたちは意気投合しました。

ある日、休日のことです。彼女は聞いてほしい話があると私を呼び出しました。

ご飯に行くのはいつも会社帰りのことだったので、お昼に彼女とプライベートで会うのは初めてでした。

明日香がやってくる。

明日香 遅れてすみません。

あきほ あ、いや。あたしも今きたところ。

そこに電話の着信。

あきほ (着信を見て) うわ。

明日香 あ、どうぞ。出てください。

あきほ (電話に出る) もしもし。

こなつ (電話の向こうから) もしもし。あんた、今日、暇？

あきほ 暇じゃない。

こなつ よく言うよ。あんた休みの日にやることなんかないでしょ。

あきほ ひどい言い方するねー。

こなつ 今日ね、久々にみはるがくるんだけど。だからあんたもいらっしやいよ。

あきほ は？ なにそれ。

こなつ ちょっとね、相談というかね、聞いて欲しいことがあんのよ。

あきほ 相談……。

こなつ まあ、そんな大袈裟な話じゃないんだけどね。

あきほ でも、あたしちよっと今、出先だから。

こなつ あ、そうなんだ。

あきほ ま、でも夕方くらいなら、行けるかも。

こなつ だったらウチで夕飯食べていきなさいよ。夜はゆうみも帰ってくるから。

あきほ ああ、うん。

こなつ それじゃ。(電話を切る)

あきほ あ、ごめん。お待たせ。

明日香 いえ、あ、大丈夫です。

あきほ あのさ、夕方。実家の姉が相談があるって言うんだよね。だから時間、リミットあるけど。いいかな。

明日香 ああ、全然大丈夫です。

あきほ じゃ、その辺にあるちよつどいい感じの適当な喫茶店にでもいく？

明日香 はい。

あきほ ※そうして、あたしたちは適当な喫茶店に入りました。

喫茶店。

明日香 (店内を眺めながら) なんか、その辺にあるお店だったけど、ここって、ちよつどいい感じの、適当な喫茶店ですね。

あきほ そうだね。

明日香 あの、先輩のおうちってどこなんですか？

あきほ 実家？

明日香 はい。

あきほ あたしんちは田舎だよ。いの町。

明日香 じゃ、ここからだとして30分くらいですか？

あきほ もうちよつとかかるかな。あたしんちって、仁淀川沿いの奥の方だから。

明日香 へー。ああ、そうなんですか。あたし、実はキャンプするんで。仁淀川の方、まあまあいきますよ。

あきほ あー、そうなんだ。

明日香 どうですか、一緒にキャンプ。

あきほ あ、あたし、そういうのはちよつと。

明日香 ですよねー。

あきほ なんか、ほら、もう小さい時から自然に囲まれて育ってるから、今更アウトドアとかね、興味が無いというか。

明日香 それ、すごいなあ、うらやましいなー。

あきほ 吉村さんもずっと高知だよ。

明日香 はい。

あきほ いつからアウトドアに興味持ったの。

明日香 あたし、大人になってからですよ。ここ2年くらいかなあ。それまではずっと都会に憧れてたんですけどね。なんか突然？

あきほ 突然。

明日香 なんだろう。なんかテレビで見たのかな。急に、外でご飯食べたりするの楽しそうだなと思って。

あきほ へえ。

明日香 外でお湯を沸かしてコーヒー淹れたりするの、楽しいですよ。

あきほ ふうん。

明日香 興味なさそう。

あきほ つーかね、ウチの実家、仁淀川がすぐだからさ。結構そこでコーヒー淹れて飲んだりすんのよね。

明日香 えー。

あきほ だから、それ、普通かも。

明日香 マジかー。すげーうらやましい。実家のそばでそんなことできるなんて。

あきほ いつかおいでよ。遊びに。

明日香 えー。まじっすか。ほんと、あたし、真に受けますよ。そういう冗談通じない人なんで。

あきほ いいよ。そんな時はあたしがコーヒー淹れてあげるから。

明日香 うわー。楽しみだなあ。絶対ですよ。

あきほ うん。

明日香 ……。

あきほ ……。

明日香 あの。

あきほ なに。

明日香 実は、先輩にあたし、相談があつて。

あきほ ……相談。……どんな。

明日香 あの、実は。あたし、まだ誰にも言っていないんですけど。

あきほ ……うん。

明日香 あたし、仕事辞めようかと思つてて。

あきほ え。

明日香 ……はい。

あきほ 会社、辞めるの？

明日香 まだ、決めたわけじゃないんですけど。

あきほ なんて？

明日香 その……なんというか。うまくやっていると自信がないというか。

あきほ ほう……。

明日香 会社に入って最初の頃は、仕事の量が少なかったんで、なんとかやれてたんですけど。最近、回ってくる仕事が増えちゃつて。でもあたし仕事のペースはあんま変わってなくて。だから、毎日帰りがすごく遅くなつて。

あきほ うん。

明日香 なんか、毎日、あたし何のために生きてるのかなーつて。わかんなくなつてきちゃつて。

あきほ そつか。

明日香 はい。

あきほ やめた後、どうするか決めてんの？

明日香 いえ。

あきほ どうすんの。やめてから。仕事にかやしないと生きていけないでしょ。

明日香 はい……。

あきほ ……。

明日香 あたし、どうしたらいいんでしょうか。

あきほ ……吉村さん、デザインやってて楽しい？

明日香 ……。

あきほ そうか。答えられなくなっちゃったか。

明日香 お絵かきは好きですよ。今でも。

あきほ でも、仕事でやるのは、そういうのとは違うからねえ。

明日香 ……そうなんですよね。

あきほ ……仕事、つらい？

明日香 ……つらい、かもしれない。

あきほ ……なんか。…あたしも悲しくなってきた。

明日香 ……なんで先輩が悲しくなるんですか。

あきほ わかんないよ、わかんないけど。吉村さんがそんなつらい気持ちで毎日仕事してるって思うと、悲しくなっちゃった。

明日香 先輩、すごい優しいですね。

あきほ 優しくない優しくない。そういうんじゃない。だってさっき、やめた後のこと考えてないって聞いた時、馬鹿じゃねえの？って思ったし。

明日香 ひどーい。

あきほ だって、そうじゃん。

明日香 ……ですよー。

あきほ とはいえ、嫌な仕事をいつまでも続けるわけにはいかないか。

明日香 でも、今は、先輩が会社にいるから、そんなにつらいことばかりでもないです。

あきほ え。

明日香 だって先輩おもしろいんだもん。

あきほ おもしろい？

明日香 おもしろいですよ、先輩。

あきほ ※明日香はその時、話題の割には楽しそうにしていました。

少なくとも私の目にはそう見えていました。

ですが。

明日香は、次の月曜から、会社に来なくなりました。

ま、その話はまたあとにするとして。

あたしは明日香とわかれて実家で待つ姉の元に向かいました。

こなつの家、リビング

こなつとみはる

そこにあきほ

あきほ ごめん、おそくなっちゃって。

こなつ ああ。

みはる いま文旦剥きゆうけど、食べる？

あきほ 食べる。

文旦をむいている。

こなつ これ、その松田さんところからもらった文旦やきおいしいよ。

みはる ああ、松田さん、まだ文旦わけてくれゆうがや。

こなつ ゆず酢もろうちゆうけど、あんた持って帰る？

みはる もらうらう。

こなつ (あきほに) あんたは？

あきほ いらん。

こなつ なんです。

あきほ 使わんもん。あんまり。

みはる なんです。

あきほ 使わないのよ。いつも余らせるもん。

みはる 料理せんきよ。

あきほ 料理したって使わないもんは使わないの。

みはる えー。

こなつ いや、料理せんでもね、何にかけても美味しいがやき、ゆずは。あたし、あれにかけちゃう。どん兵衛。

みはる えー。

あきほ なに、どっちにかけんの。赤いきつね？それとも緑のたぬき？

みはる それどん兵衛じゃねえよ、マルちゃんだよ。

こなつ おそばにもうどんにも合うがよ。ほら、おうどんにゆずかけるお店があるろ。それと同じ感覚よ。

あきほ ぜいたくー。

こなつ たくさんもろうてよ。うちでも使いきれんがよ。ちよつとばあ持っていかん？

あきほ えー。いらないー。

こなつ ちよつとー。

みはる あたしがもらうもらう。こんなね、価値のわかってない人あげるより、あたしがもらったほうが全然いいよ。

こなつ あ、そう？ じゃ、あんたもらう？

みはる うん。そんでお寿司にするわ。ちらし寿司。

あきほ いいねえ。あたし、その出来上がりにお呼ばれしよう。

みはる 図々しい女。

こなつ あんたたちお茶飲む？

みはる うん。

あきほ あたしも。

みはる 今日は、ゆうみは？

こなつ ああ、部活の、なんか、試合やと。

みはる へえ。

あきほ なんだっけ、部活って。

こなつ テニス部。

あきほ そうだそうだ。

みはる いいなあ、高校生かあ。部活ねえ。楽しそうだな。

あきほ あ、でも、いまって普通に部活やれてんの？

こなつ え？

あきほ ほら、密になったりしないの？ 部活動って。

みはる テニスじゃ密になんないでしょ。あんたが思ってるより広いんだから、テニスコート。
あきほ なんじゃそりゃ。

こなつ ちよつと……話つてのはそのことながやけど。

みはる え？ テニスコート？

こなつ ちがうちがう、なんでテニスコートの話であんたたち呼ぶがよ。

みはる だよね。

こなつ ……その、ゆうみのことながやけど。あの子、実は部活、辞めちゆうがよ。

みはる え？ ……辞めちゆうが。

こなつ ……うん。

みはる じゃ、どこ行っちゆうが。いま。

こなつ ……わからんがよ。

みはる わからんって……。

あきほ 今日は？ 試合じゃないの？

こなつ ほんとうは、試合じゃない。

あきほ なんでわかるの。

こなつ あの子の同級生のお母さんに確認したから。

あきほ はー。

こなつ つていうか、実はもう何ヶ月も前に部活辞めちゆうがらしい、あの子。

あきほ えー。

こなつ 「ゆうみちゃんはもう随分前に部活辞めてるみたいですよ」なんて言われてよ。「お母さん、ご存知なかったんですか？」つて、あたし、しどろもどろになっちゃったよ。

あきほ へー。ゆうみ、内緒で部活辞めてんだ。それで嘘ついて出かけてるんだ。なかなかやるじゃん。

こなつ やるじゃんじゃないき。まったく。おかしいなあとは思いつたがよね。洗濯せんなつたき、練習着。学校で洗濯しゆうとか言つてよ。

そんなわけないよね。学校で洗濯らあて。おかしいとは思つたけど、ほら、あれやん。スクールウオーズなんかじゃマネージャーが練習着を洗つたし。だから、そういうもんがかなーと思うてよ。

あきほ ……まあ、知らんけど。

こなつ あの子、どこ行きゆうがやる。

みはる 連絡したら？

こなつ え？

みはる 連絡したらええやん。今どこにいんの？ って。

こなつ むりむりむり。

みはる なんですよ。

こなつ なんて言ったらいいかわかんないもん。

みはる わかんないって、お姉ちゃん母親やる。そのくらいズバツと聞いてもええがやない？

こなつ そうなだけでさあ。

あきほ みはるちゃん、そんな単純な話じゃないって。母親だからってそんなズバツとはいかないよ。

みはる そうかなあ。

あきほ そうかなあじゃないよねえ。みはるちゃんが高校生の時なんてさ、スカート短くした時も、変な髪型にした時も、誰もなにも言えなかつたんだから。

みはる へんな髪型なんかしてないき。

あきほ してたよねー。なんか、この辺りあげちゃってさ。みんな言えなかったんだから。それ、おかしいよって。

みはる 高校時代の話を掘り返すなっつーの。関係ないじゃん、ゆうみの話と。

あきほ 関係ないけど。たとえ相手が自分の娘でも、高校生にもなると気を遣うってことよ。

みはる どうなが、お姉ちゃん。

こなつ うーん、まあねえ。……どうながやる？ 直接聞いたほうがええがやるか。

みはる はっきり聞きや。

こなつ あきほはどう思う？

みはる 変なところ行ってたらどうするがよ。さつと聞いたらええやいか。

こなつ みはるは黙っちゃいて。あきほに聞きゆうがやき。

あきほ うーん。どうかなあ。別にほつともいいような気もするしねえ。

みはる 無責任なこと言わんといてよ。変なことに巻き込まれたらどうするが。

あきほ 変なことってどんなんよ。

みはる たとえば……援助交際とか。
こなつ 援助交際！
あきほ ないないないない！
みはる あたしも、そんなことないって思うよ。でも、あるかもしれんやん。
あきほ ないってそんなの。
みはる なんて言い切れるがよ。
こなつ いやー、あの子に援助交際は無理やろ。だって社交性がないし。
みはる それは社交性で語っていいものなのか？
あきほ もしかして
こなつ なに。
あきほ 彼氏ができたとか。
こなつとみはる 彼氏か！
みはる それはなくはない。
こなつ なくはない、かー？
みはる なくはない？
こなつ でも、あの子、部活やめちゅうがよね。
みはる そうだよ。
こなつ 彼氏ができたき部活辞めるって、それ、やばいろ？
あきほ そう言われたら……。
みはる 確かに……。
こなつ 学生生活のほとんどを恋愛にぶつけるようなタイプではないと思うがやけどね。
あきほ そうだなあ。
みはる じゃ、何で嘘ついちゅうがやる。部活続けてるふりなんかして。
あきほ ほんとにそんなフリしてんの？
こなつ フリしちゅうよ。今日だって、ラケットと着替えと持って行っちゅうがやき。
あきほ そうかー。

みはる 家にいたくないがやないが？

こなつ なんて。

みはる しらんけど。……お姉ちゃんだつてこの家出たいつてずっと言いよつたやん。

こなつ そんな昔の話を蒸し返さんとして。

みはる だつて言いよつたやんね。こんな家でつてやるーみたいなこと。

こなつ なに、あんた。もしかして、さっきの髪型のことまだ根に持っちゃうが？

みはる え？

こなつ あんたのカツパみたいな頭の話してたのはあきほやきね。やり返すならあたしじゃなくてあきほにしてよ。

あきほ カツパとは言つてないけど。

みはる カツパはいいよ。つか、カツパじゃねえよ。お姉ちゃんね、高校の頃は相当だったよ。ゆうみだつてよ、あの時のお姉ちゃんと同じ

くらいの年齢になつてんだから。

あきほ 確かに。

みはる ゆうみはよ、見た目は普通やけどよ。別にとりたててスカートを短くもしてないし、攻めた髪型にもしてない。

こなつ 攻めた髪型……。

みはる でも、もしかしたら、ゆうみも、心の中では攻めた髪型になっちゃうかもしれないやん。

こなつとあきほ 心の中では攻めた髪型……。

あきほ カツパじゃなくて？

みはる カツパじゃありません。

こなつ そんな、結局、あの子はどうして嘘をついているんでしょうか。

みはる ……はい（はつきり答ええない）

こなつ こいつ、結局なにもわかつてないね。

みはる わからんよ、そんなん！

あきほ うわ、逆ギレした。

みはる お姉ちゃんの方がわかるでしょつてこと、私が言いたいの。

こなつ なんてあつたが。

あきほ ま、確かにね。みはるちゃんの言う通り、高校生の時こなつちゃん、家にあんまり寄り付かなかつたよ。似てるよね、ゆうみと。

こなつ そうやろか。

みはる あの時、なんで家に帰りたくなかったのか、考えてみたらいいじゃん。

こなつ うーん。もう随分と昔のことやきねえ。……忘れちゃったよ。

あきほ 忘れた！ そんなバカな！

みはる 東京へ行きたいって言ってたよね。

こなつ ああ、うん、まあね、確かに。

あきほ ゆうみもそんなこと考えてたりするんじゃないの？

こなつ えー、あの子が？ そんなで部活辞めちゃうが？

あきほ そこはすぐにはつながらないかもしれないけど、無関係でもないかもしれないじゃん。

こなつ いやー、でも、あの子がそんな、この家を出たいって考えゆうとは思えんけどなあ。

みはる 進路。どうすんのあの子。

こなつ ああ、県立大の福祉に行こうとしゆう。

みはる 地元に残るか。堅実だなー。

あきほ お姉ちゃんと全然違うね。

みはる 県外に出たいと言わんかった？

こなつ 全然。向こうから先に決めてきたがよ。相談とか無し。これから高齢化社会やき、仕事があるきって。

みはる 堅実ー。

あきほ お姉ちゃんとは全然違う。

みはる ほんとよ。お姉ちゃんは絶対この家をでるんだーつつつて、実際出て行ったがやきね。

こなつ 本気やったもん。絶対に受験失敗せられんって、そのことだけ考えてたもん。

あきほ でも、それでさ、マジで受かって薬学部いっちゃうとはすごいよ。

みはる お姉ちゃんさあ、ちゃんとゆうみと話したほうがええがやないろか。本当はさ、ゆうみも、なにかやりたいことがあるかもしれんよ。

こなつ そうやおか。

あきほ だよね。ゆうみも、心を刈り上げてる可能性、あるね。

こなつ なるほど、心を刈り上げちゆうがか……ゆうみは。

みはる ……。

こなつ でも。なんて切り出したらええがよ。
みはる 知らないよそんなの。

あきほ なんか、適当でいいんじゃない？ 進路どうすんの？ とか、本当は県外に行きたいんじゃないの？ とか。

こなつ あんたたちから聞き出してよ。

みはる いやだよ。

あきほ あたしだっていやだよ。

こなつ なんでよ。たった一人の姪が困っちゅうのに。力になってあげてよ。

みはる 困ってんのは姪じゃなくて、お姉ちゃんでしょうが。

こなつ 薄情なこと言わんといてよ。ほら、あんたたちも気になるろ。ゆうみが本当はどこに行っちゅうのか。どこの誰とつきあいゆうのか。

あきほ ま、もし彼氏ができてんなら、どんなのと付き合ってるかは、興味なくはないかな……。

みはる でも、だからって直接聞くのはしんどいぞ。

こなつ ねえ、お願い。

その時、こなつのラインが着信。

こなつ あ……（画面をみて）ゆうみだ。迎えに来て、だ。

（電話でる）あ、もしもし。

あ、うん。どこまで行けばいい？

あ、そう。

あのみ、今日はみはるとあきほが来ちゅうがよ。

うん、それでね、3人の誰かが迎えに行くから。

うん、だいたい30分くらいかな。

じゃ。

（電話を切って）ふー。

みはる ふー、じゃねえよ！ なんで勝手に「誰かが迎えに行くから」なんて決めてんだよ！

こなつ おねがい！ 今日誰かが行くことにしよう。ね、ぐっばで決めよう。

あきほ　ぐっぱか。

みはる　おい、ちよつと乗ってんじやないよ。

こなつ　早くしないと、あの子待ちゆうき。ほら、ぐっぱ、行くよ。

みはる　ああ、もう。

三人　ぐっぱの揃いぞね……。

ゆうみの話

ゆうみがいる

みはるがやってくる

みはる お待たせ。

ゆうみ あ、みはるちゃん。

みはる あのさ、なんか、お母さんがさ、夕ご飯できるまでまだちょっと時間あるから、どこか喫茶店でも入ったらって。あたしお小遣いもらってきちゃった。

ゆうみ ふうん。

みはる その辺の、ちょうどいい感じの適当な喫茶店にでもいく？

ゆうみ いいですよ。

喫茶店。

みはる (店内を眺めながら) なんか、その辺にあるお店だったけど、ここって、ちょうどいい感じの、適当な喫茶店だね。

ゆうみ そうかな。

みはる 何も食べなくていいの？ ケーキとか。

ゆうみ あ、大丈夫。

みはる お金、もらっちゃったんだけどな。

ゆうみ だって、お腹空いてないし。

みはる あ、そう……。だったら、もらったお金、ゆうみにあげようか。お小遣いで。

ゆうみ え、いいの。

みはる いいよ。だって、これあんたのお母さんからもらったお金だから。あたしがもらうよりいいでしょ。

ゆうみ やった。

みはる 今日……試合だったの？

ゆうみ ああ、うん。

みはる あ、そう。

ゆうみ ……。

みはる 天気、よかったね。

ゆうみ え？

みはる 天気。

ゆうみ そうかな。まあまあ曇ってたけど。

みはる ……日差しが強すぎなくて、よかったって意味。

ゆうみ そっか。確かに。今日はそんなに暑くなかった。

みはる ……。

ゆうみ みはるちゃん。

みはる はい。

ゆうみ 大輔さん、元気？

みはる ああ、多分。

ゆうみ 多分ってなに。

みはる なんかずつとスマホのゲームやってる。

ゆうみ いつも通りじゃん。

みはる ほんと、いつも通り。つまんないよね。

ゆうみ でも、それわかってて結婚したんでしょ？

みはる うーん、まあ、どうなのかね。

ゆうみ どんなゲームやってんの？ 大輔さん。

みはる ……なんか、上の方に財宝とか溶岩とかがあって、ほんと、下におっさんがいて、ピンを抜くと溶岩が落ちてくるやつ。

ゆうみ なにそれ。……もしかして、ユーチューブみてたら広告で出てくるやつ？

みはる それそれ。

ゆうみ えー。まじで。ほんとにいるんだ。あれやってる人。

みはる　ウチの夫だね。

ゆうみ　みはるちゃんの夫だったか。

みはる　……ウチの夫のスマホゲームはどうでもいいんだよ。

ゆうみ　確かに。

みはる　あのさ、あんた、ちょっと、小耳に挟んだんだけどね。

ゆうみ　なに？

みはる　部活辞めたんだって？

ゆうみ　は？

みはる　それ、本当？

ゆうみ　誰に聞いたの？

みはる　……あんたのお母さんよ。

ゆうみ　お母さんは誰から聞いたんだろ。

みはる　……さあ。

ゆうみ　……。

みはる　なんで辞めたの？　テニス。

ゆうみ　……。

みはる　言いたくないの？

ゆうみ　みはるちゃんって。

みはる　何。

ゆうみ　あたしとお母さんと、どっちの味方？

みはる　味方……。

ゆうみ　今日って、お母さんに頼まれてきたんでしょ。

みはる　まあ、頼まれてっというか、まあ、そんな感じか。

ゆうみ　じゃ、お母さん側だ。

みはる　いやいや、まだゆうみの話を聞いてないし。お母さん側とかゆうみ側とか、そんなのわかんないよ。

ゆうみ　言いたくない。

みはる えー。

ゆうみ ……。

みはる じゃあ、今日どこに行ってたかくらいは教えてよ。

ゆうみ ……。

みはる お母さん心配するしきあ、それくらいは教えてあげてもいいと思うよ。

ゆうみ ……アルバイト。

みはる アルバイト。

ゆうみ そう。

みはる なんの。

ゆうみ なんの？

みはる ……。

ゆうみ どうしてお母さんはあたしに直接聞かないのかな。

みはる ……きつと、お母さん、ゆうみにどんな風に聞いていいかわかんなかったんだよ。

ゆうみ ……はあ？ 何それ。

みはる ……まあ、そうだなあ。何それだなあ。

ゆうみ ※わたしが小学生の頃に父が死にました。
交通事故でした。

あまりにも突然だったので、あたしはそれがどういことだったのか、その時はよくわかっていませんでした。
お葬式の時、母が泣いているのを初めて見て。

お母さんも泣いたりするんだって、すごく驚いたのを覚えています。

その頃、わたしたち家族は東京に住んでいたんですけど、おじいちゃんとおばあちゃんの介護のこととかあつて
そんな事情でこの家に引っ越してきました。

今はこの家にわたしとお母さんの二人つきりです。

お母さんはたまに寂しそうな顔をしてる時があります。

なんでそんな顔をしてるのか、わたしにはわかりません。

お母さんが何を考えているのか、わたしにはわかりません。

食卓で。

ゆうみとこなつ

こなつ (スマホを見ながら) うっわ。

ゆうみ え？

こなつ ……え？

ゆうみ なに。

こなつ あ、いや、あたし、声出ちよった？

ゆうみ 出てたよ。なに。

こなつ あ、いや、バケモンみたいだなんて思って。安達祐実。

ゆうみ ……あだちゆみ。

こなつ この人って、他の人と時間の流れ方が違うのかな。
ゆうみ ……。
こなつ アンチエイジングかあ……。
ゆうみ お母さん。
こなつ なに？
ゆうみ お母さんって、なんで東京に出て行ったが？
こなつ え？
ゆうみ 大学の時。
こなつ ああ、うん。なんかね、都会に憧れちよったが。
ゆうみ へえ。都会かあ。
こなつ あんたは憧れとらんが？ 都会に。
ゆうみ 別に。
こなつ 出た。別に。
ゆうみ 別に出てないき。
こなつ まあ、若気の至りよ。あたしにもね、安達祐実みたいな時代があったがよ。
ゆうみ 安達祐実みたいになって。お母さんと同じくらいの歳じゃないが？ 安達祐実
こなつ え？ いやいやいやいや。全然若いでしょ安達祐実。
ゆうみ ウイキで調べたら？
こなつ えー。うそ……。 (スマホを手にとり調べる) そんなことは……。 うわ、まあまあ行っちゃう。
ゆうみ だけど全然違うよね。
こなつ 全然違うよ。違うのはわかってるけどね。人に言われると腹立つわ。
ゆうみ お母さんって、なんで薬剤師になったが？
こなつ そういう学校に行ったから。
ゆうみ なんでそんな学校に行ったが？
こなつ 東京に行きたかったからよ。
ゆうみ でも、べつに薬学部じゃなくてもいいじゃん。

こなつ 何言いゆうが。お母さんがちゃんと手に職つけたき、あんたもこうして生きていけてんでしうが。
ゆうみ ……。

こなつ あ、そうそう。今度の土曜、荷物届くき、あんた受け取ってよ。
ゆうみ 土曜ダメ。
こなつ なんて。
ゆうみ 試合。
こなつ また？
ゆうみ まただよ。

こなつ えー。土曜だったら受け取れると思って指定したのに。
ゆうみ 玄関に置いといてもらったらしいじゃん。
こなつ ダメながよ。クール便だもん。
ゆうみ クール便？ 何頼んだが。
こなつ 魚の干物。
ゆうみ あがらねえわー。

こなつ 何言いゆうが。あんたおいしいおいしいって食べるでしうが。
ゆうみ 食べるけど。クール便っていうからなんかもっと、ゴージャスなもの想像しちゃったよ。
こなつ どんなんよ。
ゆうみ どんなんて……。イクラとか、メロンとか。
こなつ 発想が貧困だね。
ゆうみ うるさいわ。

こなつ 干物だってね、そこそこの値段するがやき。そこそこ高級品ながよ。あーあ、残念。土曜の夜に食べようと思っちゃったに。
ゆうみ お母さんが受け取ったらしいじゃん。
こなつ あたし仕事だもん。だから頼みゆうがやろあんたに。あ。そうだ。みはるを呼ぶか。
ゆうみ そんなのにみはるちゃん使ったら気の毒だよ。
こなつ 大丈夫。みはるは家でじっとしてるより、ちよっと外に出た方が気が紛れるタイプだし。
ゆうみ だからだったって、クール便受け取るために呼ぶのはちよっとひどいよ。

こなつ じゃ、あんたが家にいるか？

ゆうみ ……日曜じゃダメなのか？

こなつ まあ、いいかどうかさ、聞いてみたらいいじゃん。……はいライン送った。……お、はや。もう返事きた。……オツケーだって。

ゆうみ 暇がかなあ。

こなつ だって、どこも出かけられんろ。みんな今は時間を持って余しゆうがよ。

ゆうみ でも、だんなさんいるじゃん。

こなつ あそこのだんなは真面目やきねえ。こういう時は家でじっとしてるタイプでしょ。

ゆうみ ふーん。

こなつ ようし、みはるにも干物、少し分けてあげよう。お裾分け。

ゆうみ 勝手にしなよ。

こなつ あれだね、コロナになってからみはるのだんな、釣りに行かないから、魚が回ってこないね。前はみはるがよく持ってきよったろ。

お裾分け。

ゆうみ あたし、鮎嫌いだからどうでもいい。

こなつ バカね。みはるのだんなが釣ってくるのは鮎だけじゃないよ。川じゃなくて海の時もあるがやき。ほら、鮎は時期があるから。海だ

と年がら年中、なにがしか釣れるがやる。知らんけど。

ゆうみ あたし魚より肉がいい。

こなつ お酒飲むようになったら変わるよ。お魚おいしいがやき。あんた、日曜は家におるが？

ゆうみ ううん。部活。

こなつ 何時から？

ゆうみ 朝9時に学校。

こなつ えー、早い。平日の出勤と変わらんやん。

ゆうみ ああ……うん。ごめん。お願い。

※はあ、また嘘をついてしまった。あたし、いつになったらお母さんに本当のことを話せるのかな。

つつか、お母さんの送り迎えじゃなきゃ街へ出れないというのは本当にストレス。

早く、誰の力も借りず、自分一人で街に出れるようになりたいです。

ほんと、田舎暮らしはすごい不便です。

明日香とあきほ

あきほ ※明日香はあたしに黙って会社を辞めました。

あたしはそれから明日香と連絡を取らなくなって

彼女からも連絡が来なくなつて

そのまま1ヶ月ほど過ぎました。

なんだか、このままではいけないんじゃないか。

そんな気持ちがあたしの中でぐるぐるとまわつてて。

それで。あたしは決心しました。

あきほ、電話をかけている。

明日香 もしもし。

あきほ ……。

明日香 先輩。

あきほ 吉村さんって、上町のあたりに住んでるって言ってたよね。

明日香 あ、はい。

あきほ あたし、いま、多分、近くにいます。

明日香 え。

あきほ 久しぶりに、ちょっと会って話をしない？

あきほ ※そうして近くの公園であたしたちは待ち合わせをしました。

明日香 お待たせしました。

あきほ あ、うん。

明日香 (ベンチを指差して) 座りますか？

あきほ うん。

二人、ベンチに座る。

明日香 まだ、ちょっと肌寒いですね。

あきほ そうかな。

明日香 寒いですよ。あ、でも、あたしがずっと家から出てないからかな。

あきほ 家から出てないんだ。

明日香 ……はい。

あきほ ……でも、びつくりしたなー。いきなりいなくなるんだもん。

明日香 ……すみません。

あきほ すいませんといいか…。うん、なんというか…。驚いた。

明日香 ……ですよねー。

あきほ いま、なにしてんの？ なんか新しい仕事始めた？

明日香 ……いえ。まだ何もやってません。

あきほ そっか。

明日香 先輩には、きちんと行ってやめなきゃって思いよったがですけど。言えませんでした。すみません。

あきほ いや、うん。思い返せば、あの日、吉村さん、何か言いたそうだったなあってね。後から後悔したよ。

明日香 後悔、ですか。

あきほ うん。ちゃんと、真剣に聞いてあげられなかったなあと思ってさ。

明日香 はい。

あきほ それと、なんでちゃんと話してくれなかったんだらうって、ちょっとムカついたかな。

明日香 すいません。

あきほ いつ頃からやめるって考えてたの。

明日香 うーん。だいぶ前からぼんやり考えてたんですけど。きっかけは、先輩と一緒にやったあのお仕事です。

あきほ あの仕事。

明日香 はい。あの時、もう、あたし、ついていけないってなりました。

あきほ ……あたし、追い詰めちゃった？

明日香 全然違います。先輩は何も悪くありません。ただ、ごまかしてたことがごまかせなくなっただけです。

あきほ ……。

明日香 あたし、自分で好きな絵を描くのはできるんですけど、人に頼まれるのって、あまり得意じゃなかったがです。そういうこと、自分でわかってませんでした。何度も何度も書き直しをさせられると、だんだん、自分が何を描こうとしているのかわかなくなりました。あたしは最初に描いた絵が一番好きなのに、人からいろんなこと言われてるうちにどんどん形が変わって行って、なんか、私のものじゃなくなっていくような感じがして。なんで最初のじゃダメだったんだろうって、すごく悲しくなりました。気がついたらお仕事がとてつらく感じるようになってました。

あきほ でも、人からアドバイスされて、それで良くなる場合もあったんじゃない？

明日香 ずっと、そう考えるようになってきました。がんばってみたんですけど。あたし、そんなに器用じゃないみたいです。言われた通りにうまくできません。先輩、あたしには才能がないんです。

あきほ 吉村さん。

明日香 本当はお絵かきが大好きだったはずなのに、こんなに毎日毎日、絵を描くのがつらいと、あたしが好きだったのは一体なんだっただろうって。そう思うと本当に苦しくて。

あきほ ……。

明日香 そんな時に、先輩とお仕事を一緒にしたんです。なんか、先輩はすごくお仕事を楽しそうにして。あー、この人、仕事をしている時、ほんとにかっこいいなあーって思ってた。それであたし、わかったんです。あたしはこの会社にいたらいけない人なんだって。先輩みたいな人がここで仕事をするべきだって。

あきほ そんなことないって。吉村さんだって、ちゃんと仕事してたじゃん。

明日香 頑張ってたんですよ。あたし。だからなんとか着いていけたがです。でも、もう限界なんです。

あきほ ……。

明日香 お仕事で絵を描くのは向いてなかったがですね。だから、今度は、違う仕事をしようと思って。全然違う、お絵かきとは関係ないお仕事に。

明日香、俯いてしまう。

あきほ、ぐっと近づいて肩を抱く。

明日香 先輩。

あきほ うん？

明日香 いま、先輩に優しくされると、あたし。離れられなくなるかもしれません。

あきほ ……。

明日香 先輩。

明日香、上目遣いにあきほを見る。

ふたり、かなり距離が近い。

あきほ 吉村さん。

明日香 はい。

あきほ (ゆっくりと離れながら) ……デイスタンス。

明日香 えー……。

あきほ ごめん、あの、ちよつと、その……。

明日香 (警戒して) ……はい。

あきほ あ、いや、あのさ。今、吉村さん、弱ってるから。なんか、今急に距離が縮まっちゃうと、あたしがその弱みに付け込んでるみたいで。

あたし、そういうのって、性に合わないんだ。

明日香 先輩は弱みにつけこんだりしてないですよ。

あきほ 知らないじゃん、あたしのこと。

明日香 じゃあ、もつと教えてくださいよ。

あきほ ……いま、吉村さん、ちゃんとしてないから。あたし、このまま吉村さんと仲良くなっちゃうと、全部の面倒を見てあげたくなっちゃ

うんだ。そんでね。そういうのって、最後はいいことにはならないんだよ。

明日香 ……そうなんですか？

あきほ だから、今は、ちよつと。もうちよつと離れてよう。

明日香 ……先輩はおとなですね。

あきほ ……え。

明日香 すごいなあ。いつも先輩って、あたしにはできないことが簡単にできちゃうから。だからあたし先輩のこと、尊敬しゆうがです。

あきほ ……ああ。ありがと。

明日香 そんな。おとなって、こういう時、突き放すもんがですね。勉強になりました。でも、だったら寂しいですね。おとなって。

あきほ ……。

明日香 わかりました。私が前向きに、なにかの目標を見つけて、そこへ向かって努力することができるようになったら、先輩はあたしと一緒にいてくれるがですね。だったらあたし、頑張ります。

あきほ ……。

明日香 でも、それって、いつながでしょうね。いつくるがですか？ 本当にききますかね、そんな日が。

……あたし、いつまで経っても、おとなになんかなれないかもしれません。

あきほ ……。

明日香 今日は来てくれてありがとうございます。久しぶりに先輩の顔が見れて嬉しかったです。それじゃ、あたし帰ります。さよなら。

明日香、走り去る。

あきほ、それを見送っている。

あきほ (頭をかきむしって) うわー。

みはるの家

みはると大輔

大輔はスマホを突いている。

みはるはほうじ茶を飲んでる。

みはる　そんでき、ゆうみ、結局なんのバイトか教えてくれなかったんだよね。

大輔　ふうん。

みはる　娘がアルバイトかあ。どうなのかな。親としては心配なのかな。

大輔　どうかね。

みはる　でも、あれじゃない？　アルバイトくらいやるよね。高校生。

大輔　まあね。

みはる　どんなバイトやってんのかな。コンビニかな。

大輔　え？　コンビニ？

みはる　え？

大輔　……は？

みはる　……何が？

大輔　あ、いや。……何の話？

みはる　……ゆうみよ。

大輔　ああ。

みはる　……大輔はなんだと思う？

大輔　え、アルバイト？　……スーパーとか？

みはる　スーパーねえ。

大輔、またスマホのゲームに目を移している。

みはる、大輔の近くまで行き、スマホの画面が見えないように手で隠す。

大輔 うわ。何すんだよ。

みはる (やめて) 別に。

大輔 あーあ。

みはる ほんと、ずっとやってるよね、そのゲーム。

大輔 ずっとじゃないよ、たまにユーチューブ挟んでるから。

みはる ……いつまで続くのかな、こんな生活。

大輔 何がそんなにつらいの。

みはる 何が？ 逆につらくないの？ こんなに家から出れなくて。どっこにもいけないんだよ。

大輔 実家に帰ってきたらいいじゃん。

みはる 私別に実家に帰りたいわけじゃないから。

大輔 でも、そこそこ気晴らしにはなるでしょ。

みはる ……そういうんじゃないかって、買い物に行きたい！

大輔 スーパーに行ってるじゃん。

みはる そうじゃなくて。たくさん人が集まるところに行きたいの。

大輔 それは無理だねえ。

みはる ねえ。久しぶりにイオンに行こうよ。買い物たまってるし。

大輔 イオン、いかない。

みはる なんでよ。

大輔 だって、すごい密じゃん。しかも駐車場混むし。

みはる ……でも、日用品、足りなくなってるよ。

大輔 アマゾンでいいじゃん。

みはる ……アマゾンじゃなくてさ、実際に目で見て買いたいんだよ。無印にも行きたいし。

大輔 無印もネットで買えるよ。

みはる そんなねえ、過剰に心配しなくても大丈夫だよ。

大輔 大丈夫？

みはる だって、最近、感染者数多くないし。高知は。

大輔 いやー、でも潜伏期間があるからね。今出てなくても、1週間後の数字はわかんないじゃん。

みはる ……。

大輔 みはるさんだって、感染したら困るでしょ。

みはる ……感染して困らない人なんていないよ。

大輔 だったらさ、家でじっとしてるのが一番だって。

みはる あー、もう。そんな厳しいこと言ってるの、大輔だけかもよ。どこかにお出かけしたいよ。ねえ、どこでもいいからさあ。

大輔 ……。

みはる じゃあさ、あたし一人でスーパー銭湯はダメかな。一人でパッと行って帰ってくるから。

大輔 さあ。

みはる さあつて。えー。それくらい良くない？ スーパー銭湯だよ。

大輔 でも、脱衣所って結構人いるでしょ。それに、マスクしてお風呂入るわけにはいかないじゃん。

みはる ……そうだけど。…イオンもダメ。…スーパー銭湯もダメ。だったら地方に住んでる人間には行くところなんてどこもないじゃん。

大輔 家でのんびりしてろつてことだよ。最高じゃん。ずっと寝ていいんだから。

みはる 限度があるよ。限度が。

大輔 でも、家にいたら余計なお金使わなくてすむじゃん。みはるさんもなんかスマホゲームでもやって、有意義に過ごしたらいいんだよ。

みはる 有意義じゃないよそんなの。

大輔 スマホゲームじゃなくても、なんでもいいじゃん。それで、コロナが開けた頃には貯金もたまってき。そしたら箱根でも別府でも由布

院でも、好きなどころにいったらいいんだよ。

みはる (スマホを見ながら) そんな言うほどは貯まってないんだよ。なんやかんや支払いあるし。出ていくお金結構あるから。

大輔 そうなの？

みはる 生命保険二人分、それに車検と車の保険の積立、光熱費、携帯代。細かく言えばまだまだあるよ。

大輔 ふうん。

みはる ふうんじゃないよ。そういえば大輔、今月分、まだなんですけど。

大輔 え。

みはる お給料。出てるでしょ。月末に。

大輔 あ、うん。

みはる そろそろ家賃の支払いだから。忘れないでよ。

大輔 あ、えっと、そのことなんだけどね。

みはる ……なに。

大輔 大変申し上げにくいんですけど。その。お給料が減ってしまいました。

みはる へ、減った。

大輔 はい。

みはる なんで減った。

大輔 あの、それが、思うように成果が出なくて。

みはる 成果が出ないたって。そんなすぐ減給になる？

大輔 すぐじゃなくて。まあ、そこそこの期間で。

みはる ……つか、あんた、自分の給料が減ってるのに、貯金の話題をふったの？

大輔 いや、まあ。そういうことになるかな。

みはる お給料減ったら余計に貯金なんかたまらないよ。

大輔 いや、でもね、僕だけじゃないよ。結構何人か減ってるから。その、コロナで、今不況ですから。

みはる ……コロナ、コロナか。

大輔 お金、明日持って帰るから。

みはる ああ、うん。(じっと見てる大輔に) いいよ。ゲームやって。

大輔 うん。

みはる ……こりゃ、温泉旅行なんて無理だったかもなあ。

※ 夫とは、アルバイト先の居酒屋で知り合ってた。

あたしは学生で、彼はその店長でした。

そこそこ繁盛していたお店で、しかもバイトスタッフみんな仲良くて。

すごくいいアルバイト先でした。

彼はスタッフ全員をまとめるのがとてもうまくて。

人柄がいいですからね。そういうのは得意なんだろうと思います。

そんな彼と、特別な関係になった時、あたし、すごく嬉しかったのを覚えています。

ほんと、店長の彼はすごくかっこよく見えてたんで。

あたしでいいのかなって。

その時は純粹にそう思いました。

それで、あたしが学校を出たら、すぐに結婚しました。

彼は、時間が不定期な居酒屋をやめて、地元の中小企業に就職しました。

それからの彼は……なんというか。

優しすぎるといふか。

営業の仕事をするにはね、ちよつと、不器用なところがあつて。

家での会話もめつきり減つて。

彼は、あの時の彼からは想像できないような、ソファでスマホおじさんになってしまいました。

みはるの職場。休憩室。

山中さんがいる。

山中　ねえねえ、聞いてくださいー。あたし、彼ができたんですー。

みはる　へー。山中さん、彼氏できたんだ。

山中　そうなんですー。マッチングアプリでー。

みはる　ま、マッチングアプリ。

山中　そうなんですー。彼の写真見ますー？

みはる　ちよ、ちよつとまつて。マッチングアプリって、何？

山中　えー、知らないんですかー。マッチングアプリですよー。

みはる　それって、出会い系みたいなもんじゃないの？

山中　えー、出会い系ー？ 違いますよー。ウケるー。

みはる　違うんだ……。

山中　いまー、コロナとかでー、不要不急な集いはダメなんでー、みんなやってるんですよーマッチングアプリー。
みはる　……へー。

山中　あたし、彼氏できたけどー、これ楽しいんで、まだ続けてますー、マッチングアプリ。

みはる　え、それ……いいの？

山中　わかんないけどー。いっぱいマッチングしたいんでー。別にいいんじゃないですかーきゃはは。

山中、去る。

みはる　ま、マッチングアプリ、ね。(と言いながらスマホを開いて)あなたの出会いを応援する……趣味で繋がる新たな出会い、価値観重視派のあなたにオススメアプリ、女性は登録無料……すぐに出会える……趣味の合う友達を見つけませんか……既婚者はNG。……既婚者はNGか。

山中　(突然)みはるさん！

みはる　うわ！　うわ！　山中さん、え、なに。

山中　休憩もう終わりますよ。え、なに。みはるさん、なにやってんすか。

みはる　なにもしてない。やましいことなんか何もしてない。

山中　そうですかー。あたし、早速みはるさんもマッチングアプリ始めてんのかと思ったー。

みはる　始めない始めない。あたし既婚者だよ。

山中　そんなの言わなきゃばれませんって。

みはる　(スマホを見ながら)えー、顔写真載せないとマッチング率が低くなるって書いてあるし、どう考えてもばれるっしょ。

山中　あー、じゃやっぱり登録しようとしてたんだー。

みはる　ちつがう。これは、どういう仕組みになってるのか気になっただけ。登録する気は全然ないの。

山中　えー。そうなんですかー？　いいじゃないですかー。登録しましょうよー。ちよつと軽めのやつー。

みはる　いいいい。全然、そういう、あれじゃないから。あたしは。ちよつと軽めとか、もう全然違う。そういうんじゃない。

山中　つまんないのー。あー、休憩時間やばみー。(去る)

みはる　……あー。(スマホを見て)やばみー……。って、あたしそんなことがやりたかったのか？

みはる その日の仕事終わり、わたしはどうとう、禁断のイオンに立ち寄りました。

しばらくぶりのイオンは、私の知ってる、いつものイオンのままでした。

みんな普通に買い物してる。

特に、変わったところもなく、普通に、みんなイオンにきてる。

そりゃそうだよ。あたしたち、生きていかになくちゃいけないんだから。

いくつかのお店に立ち寄って、買い物をしていたとき。

ゆうみが通り過ぎる。

みはる あれ、ゆうみ。

ゆうみ (立ち止まって) あ。みはるちゃん。

ゆうみはTシャツにパーカー、ジーンズのような動きやすい格好。
ウエストポーチを肩掛けしている。

みはる 何しゆうが。あんた。

ゆうみ アルバイト。

みはる なんの。

ゆうみ ……。

みはる そのバイト、何時まで？

ゆうみ もうすぐ終わる。

みはる だったら、お茶しない？ そのコメダで。

ゆうみ うん。いいよ。

みはる ※30分後、あたしとゆうみはコメダ珈琲の店内にいました。

元気？

ゆうみ あ、うん。

みはる あたし、久しぶりなんだ、イオンくるの。コロナ騒動になってからきてなかったから。

ゆうみ あ、そうなんだ。

みはる びっくりしたよ、なに、その格好。様になってるじゃん。

ゆうみ そうかな。

みはる 何のアルバイトなの、それ。

ゆうみ カメラのアシスタント。

みはる カメラ？ カメラって、カメラ？

ゆうみ 写真の。

みはる へえ、写真の。

ゆうみ 今日はタウン誌の取材で、イオンで撮影だったんだ。

みはる へえ。そんなアルバイトしてたんだ。お母さん知っちゅうが？

ゆうみ まだ話してない。

みはる そっか。……興味あるの？ 写真に。

ゆうみ (うなづく)

みはる 将来は、そういう仕事をやりたいとか？

ゆうみ ……。

みはる 部活辞めちゃうくらいだからなあ。そりゃそうだ。本気だよなあ。

ゆうみ ……まあね。

みはる 進路どうするがよ。あんた、県立大って言いよったよね？

ゆうみ うん。

みはる 県立大じゃ写真できないでしょ。

ゆうみ うん。そうなんだけど。

みはる そうなんだけど？

ゆうみ みはるちゃん、あたし、本当に写真でやっていけるかなあ。

みはる え。

ゆうみ 県立大の社会福祉だったら、あたし、今の成績のまま行けば多分入れると思うがよね。それで、卒業したら、きっと仕事もある。でも、写真に行ったら、そんな単純にはいかんと思うがよ。

みはる まあ、そうかもねえ。写真のことはよくわかんないけど。

ゆうみ だから、このまま県立大に行って、それで大学生やりながら今の師匠のところでアルバイトして、写真の勉強しようかって思いゆうが。

みはる ……その師匠はなんて言ってるの？

ゆうみ ……東京にいけて。

みはる そうなんだ。

ゆうみ でも、師匠は高知で写真の仕事をやりゆうし。あたしだって高知でやれると思いうし。

みはる あれ？ ゆうみ社会福祉の道に進むんだよね。じゃ、写真って仕事でやるの？ それとも趣味？

ゆうみ それは……。ねえ、みはるちゃん、あたし、どうしたらいいと思う？

みはる あたしに聞かないでよ、そんな重要なこと。

ゆうみ だって、他に相談する人いないんだもん。

みはる おかあさんに相談しなよ。

ゆうみ ダメだよ。喧嘩になるもん。

みはる なんてよ、反対するかな、お母さん。

ゆうみ わかんない……。最終的には応援してくれると思う。

みはる だったらさ。

ゆうみ でも、お金かかるがよ。芸術系の大学とか専門学校って。しかも東京で一人暮らしなんて無理って。

みはる でも、相談してみないとわかんないじゃん。もしかしたら普通に応援してくれるかもよ。

ゆうみ ……。でも、やっぱ、あたし、仕事で写真がやりたいのか、まだ自分じゃわからない。だから、東京に行きたいって、まだ言えん。

みはる そう。……。でも、将来のことはおいといてさ。アルバイトのことは話した方がいいと思うよ。お母さんに。

ゆうみ ……うん。

みはる ※あたしはゆうみを実家まで送って行きました。

こなつとゆうみの家。

みはるもそこにいる。

ゆうみ　そんで……。たまたま入ったブライダルのアルバイトでそのカメラマンさんと出会って、手伝ってるうちにだんだん面白くなってきて、そしたら、アルバイト代をもらえるようになって……。本当は学校終わりとか、土日とか、その人のところに行ってた。ごめんさい。

こなつ

みはる　……ほら、こうしてゆうみも謝ってるから。

こなつ　……あんた、進路はどうすんの。

ゆうみ　……うん。

こなつ　もうすぐ学校に提出しないといかんがやない？　ちゃんと決めて出さないといけないでしょ。

ゆうみ　それは……県立大だよ。

こなつ　それでええが？

ゆうみ　いいよ。

こなつ　……あのね、あたしは、その、写真をやりたいがやったらその学校に行ってもいいって思うよ。あんたにはそういう気持ちはないが？

ゆうみ　ない。

こなつ　ないって、ないことはないでしょう。こんな、親に嘘ついてまでアルバイトしゆうがやき。

ゆうみ　あー、もう、嘘ついて悪かったよ。だから謝りゆうろ。

こなつ　うそのことをせめゆうがやないが。お母さんに相談してくれなかったことを言いゆうが。

ゆうみ　相談なんかできるわけないじゃん。

こなつ　どうしてよ。どうして娘が自分のことを親に相談できんがよ。

ゆうみ　じゃあ、相談したらどうにかなるわけ？

こなつ　なるかもしれんやん。

ゆうみ　テキストなこと言わんといてよ。お母さん、なんにもわかってないじゃん。

こなつ　なに、その言い方。

ゆうみ ……。

こなつ いい？ あたしだってね、この年になっても、本当は自分が何をやりたかったのか、わかってないんだよ。それどころか今日何を食べたいかってことすらわかんないことがあるんだから。だからね、普通は、自分が将来どんなことをやりたいのかなんて、そんな簡単なには出ないんだよ。だから、もしあんたにやりたいことがみつかったんなら、あたしはそれを尊重するよ。

ゆうみ ……。

こなつ もし、県立大に行きたいって、なにかに遠慮して言いゆうがやったら、それはね……迷惑だからやめてちょうだい。あたしが言いたいのはそういうこと。わかった？

ゆうみ ……遠慮なんかしてないよ。

こなつ 本当ね。

ゆうみ 本当だよ。くだいな。

こなつ わかった。じゃ、あとから写真やりたかったとか言わないでよ。あんたが自分で決めたことやきね。

ゆうみ そんなこと言わんちゃ！ 写真は趣味。仕事は別。……あたし、もう、課題があるから。

ゆうみ、去る。

こなつ あーあ。

みはる こなつちゃん。ちょっと言い方が厳しいよ。

こなつ そうかなあ。

みはる そうだよ。正論で相手を追い詰めてくの、こなつちゃんの悪いくせだよ。

こなつ あたしはただ、自分があの子くらいの時にちゃんと応援してもらえてなかったから。せめてやりたいことを理解してあげたいと思って。

みはる いまのは応援じゃなかったよ。どっちかという脅迫っぽかった。

こなつ 脅迫で。

みはる あー、でもなんか、懐かしかったな。昔のお姉ちゃんとお母さんの言い合いを見てるみたいだった。

こなつ ちょっと、やめてよ。

みはる お姉ちゃんもお母さんにどんどん似てきているかもしれん。

こなつ なにそれ。どこが。

みはる　なんか、言い合ってる雰囲気だ。

こなつ　うそうそ。やめて。

みはる　ちゃんと聞いてあげなよ。ゆうみの話。

こなつ　そのつもりなんだけど。なんか、話してるとき、物わかりが良すぎて、腹立ってくるがよね。

みはる　母親が娘にムカつくなよ。

こなつ　だってさ、本当はやりたいたいことがあるのにさ、自分であきらめんのよ。周りに反対されるんじゃなく、自分で。理解できる？

みはる　まあ、お姉ちゃんには理解できないかもね。

こなつ　あの子、なんに遠慮しゆうがやる。

みはる　さっきはお金のことをちよつと言ってたよ。

こなつ　お金ねえ。

みはる　それと、写真でちゃんと食っていけるかって。

こなつ　そんなこと、始める前から心配すんなつーの。

みはる　お姉ちゃん、一緒に行つてあげたら？　東京に。

こなつ　はあ？　何言いうがよ。せつかくの一人暮らしに親がついてきたら嫌に決まっちゃう。

みはる　でも、いまだに妄想するんでしょ？　都会暮らし。

こなつ　この家はどうすんのよ。

みはる　そうねえ、この家。お姉ちゃん、もう、売ったら？

こなつ　売る？

みはる　だってさ、無理に住み続ける必要もないじゃん。

こなつ　この辺りの家は売りに出してもすぐに買い手なんかつかないよ。

みはる　そうか。

こなつ　それにね、それなりに愛着もあるがよね。無くなったたら無くなったでさみしいよ。河原でコーヒー飲んだりできなくなっちゃう。

みはる　そっか、河原でコーヒーか。……でも、そのコーヒーのためにお姉ちゃん家族がここに居続けるってのは、ちよつとバランスが取れて

ない感じするかもね。

こなつ　バランス。

みはる　それに、別にあたしもあきほも、この家を無理に維持してくれって思っていないからね。なくなったらなくなつたで仕方ないことだから

さ。だから、出ていく時がきたら遠慮しないでよね。

こなつ ああ、うん。わかっている。……確かに。もしあの子がここを出ていくって決めたら、ちょっとあたし一人にこの家は広すぎるかもなあ。
みはる 市内に出てきたらいいじゃん。その時は。通勤も楽になるよ。

こなつ そうか、それもいいかもね。でも、あの子がどうするかまだわかんないけど……。

こなつとゆうみの話

こなつの家。

こなつ、みはる、あきほがいる。

3人でお茶を飲んだりお菓子を食べたり。

こなつ

※妹たちがウチに来るときは、何かしら問題を抱えていることが多いです。

みはるは……多分、ダンナのことかな。

みはるの家はあまりうまくいってないんだと思います。

あきほは、仕事のことか、それか恋愛のことか。

この子の恋愛は、学生の中から見てきてるけど

随分と悲しい思いをしてみましたから……。

ま、あたしには何も、やってあげることができません。

あたしたちはただ、お茶を飲んだりお菓子を食べたりして時間を過ごす。

特に具体的な話はなにもせず。

そういう時は、まるで、嵐がすぎるのを待ってるような気持ちになる時があります。

もしかしたら。

わたしたちにとっては、この家に集まるということ自体に意味があるのかもしれない。

ゆうみが来る。

ゆうみ

(コピー用紙を渡して)これ。

こなつ

ああ、なに? これ、進路希望の。

ゆうみ

そう。明日が提出期限。

こなつ

ちょっと。ギリギリに持ってこんどいてよ。(目を通して)あんた、本当にこれでいいのね。

ゆうみ

いいよ。

こなつ じゃ、サインするよ。

ゆうみ うん。

みはる ちよっと。(覗き込んで) えー。結局県立大にするの。

ゆうみ うん。

みはる 東京の写真の学科がある大学の話、ちよっとしてたじゃん。そこはどうすんの。

ゆうみ いかない。

みはる えー。行ったらいいじゃん。誰も反対してないよ。(こなつに) ねえ。

こなつ あたしは反対なんかしてない。

みはる ほら。反対してないって。

ゆうみ ええが。あたしは自分で決めたがやき。

こなつ もう、その話はじっくりした。本人がこれでいいっていうんだからそれでいいんじゃない？

みはる こなつちゃん。そんな突き放すような言い方しないでよ。ゆうみの進路の話だよ。これからどうやって生きていくかの話なんだから。

こなつ そんなこと言われなくてもわかつちゆう。もう十分話したんだから。

みはる ゆうみは本当にそれでいいの？

ゆうみ うん。

みはる ……あきほはどう思うよ。

あきほ うーん。まあ、ゆうみがそう決めたんなら尊重したらいいんじゃない？

みはる あんたまでそんなこと言うんだ。

あきほ (ゆうみに) アルバイトしてるんだって？

ゆうみ うん。

あきほ どんなバイト？

ゆうみ カメラマンさんのアシスタント。

あきほ へえ。どんなことしてんの。

ゆうみ レフ板持って、光当てたりとか。あと、三脚立てたり。

あきほ へえ。じゃ、実際にカメラ撮るところに行ってるんだ。

ゆうみ 当たり前じゃん。そういうアルバイトだよ。

あきほ どんな撮影があるの。

ゆうみ この前はブライダルのお仕事で、前撮りについて行ったよ。

みはる 前撮りかあ。いいなあ。楽しそう。

ゆうみ うん。

みはる この前高知城のところで撮影してたよ。なんか、色打ち掛け着て写真撮ってたな。

ゆうみ 和装は大変ながよ。着付けとヘアメイクがあつて。美容師さんたちが何人も一緒にいてくる。

あきほ 丸1日かかるんじゃないの？ 結婚式の前撮りなんて。

ゆうみ そうだよ。朝早くから夕方まで。日が暮れたらスタジオで撮影だけど、あたしは高校生だから夕方でロケが終わったら帰ってきた。

あきほ そつかー。じゃ、スタジオにはいけなかったんだ。

ゆうみ うん。本当は手伝いたかったけどね。

あきほ バイトやってて楽しい？

ゆうみ 楽しいよ。

あきほ だったらそれがゆうみの仕事になったらいいね。

ゆうみ ……。

あきほ お姉ちゃん、もうちょっとゆうみと話した方がいいんじゃない？

こなつ ……。

みはる ゆうみも、ちゃんと本当のことを話したらいいよ。

ゆうみ ……でも。

あきほ でも、何？

ゆうみ ……。

あきほ 何に遠慮してるんだね？ 君は。

ゆうみ 遠慮はしてないけど。

あきほ あのさあ。(進路希望の用紙を見て) ゆうみは県立大の社会福祉に行きたいって書いてるけどさ。社会福祉って、資格が取れたからって

て簡単にできるような、そんな甘い仕事じゃないと思うぞ。もしかしたら、君が写真家になるのと同じくらい難しいことかもしれないぞ。

ゆうみ ……。

あきほ 介護の現場が大変なのは、君もわかってるだろう。そうだよね。

ゆうみ ……。

みはる それは確かに。県立大の社福をイージーモードみたいな言い方するのは、ちょっとおかしいかもね。

ゆうみ イージーモードだなんて。そんなつもりないよ。

あきほ じゃ、どうして県立大に行きたいって思ったの。

ゆうみ だってさ。あたしが東京に出て行ったら……。

あきほ 出て行ったら？

ゆうみ ……。

こなつ あんた、もしかして。……あたしが一人になるから、高知に残ろうとしたの？

ゆうみ だって……。

こなつ えー……。ちょっと……。(あきほに) この子、優しいー。

あきほ ……ああ。

こなつ (みはる) ねえ、優しいー。

みはる ……うん。わかった。

こなつ (窓を開けて外に向かって) この子優しいー!!

ゆうみ ちよつとちよつと、やめて! 恥ずかしいき!

こなつ (振り返ってゆうみの肩を握って) あんた、あたしのことを心配してたんだ。それで、高知に残るって言ってたんだ。

ゆうみ 別に心配とか、そんなんじゃない。ただ……どうするがよ、土曜日にクール便が届いたら。誰っっちゃあ受け取ってくれんやん。

こなつ そんなん、みはるがおるから大丈夫。

みはる え? あたし?

こなつ ええが。あたしのは心配せんでいいが。あんたは自分の心配しよったらそれでええがよ。他人の心配なんかするにおよばんがで。

ゆうみ 他人って、お母さんは他人じゃないやん。

こなつ 自分以外はみんな他人よ。だって、誰っっちゃあ責任とれんがで。自分のことは自分で決めるしかないが。

ゆうみ そんなこと言って。お母さんだって。あたしのこと心配しゆうやん。それとこれと何が違うが?

こなつ あたしはあなたの母親だもん。

ゆうみ ……だったらさあ。お母さん、あたしが部活辞めてるのわかつちゅうのに、知らないふりしよったよね。それで、直接聞いてくれんと、みはるちゃん使って聞き出そうとしたじゃん。あれ、なんなが？

こなつ あ、あれはね。

ゆうみ なんて直接聞いてくれんかったが？

こなつ それは……

ゆうみ 人を使って聞き出すなんて卑怯じゃない？

こなつ ……卑怯、かあ。

ゆうみ ……卑怯だよ。

こなつ ……ごめん。ゆうみ。あなたに、ちゃんと聞くことができなかつた。あたしに意気地がなかつたがよ。ごめん。ちゃんと聞くべきだったね。

ゆうみ ……そんな、ちゃんと謝らんとつてよ。

こなつ でも、あなたがやりたいことがわかつて、あたし、嬉しかったがよ。さっきの、アルバイトの話も、聞いて嬉しいが。だから、本心から、あなたに好きなことを続けて欲しいがよ。その好きなことを、あたしのために諦めさせたら、そんな、ずっと心にひっかかるやん。あたし、これからの人生でずっとそのことを後悔するよ。

ゆうみ ……。

こなつ だから、あたしのためにあきらめんとつて。

ゆうみ ……おかあさんのためじゃない。

こなつ じゃあ、何。何が理由なが？

ゆうみ あたし……。

こなつ あたし？

ゆうみ あたし、自信がない。

こなつ ……えー。

ゆうみ 自信がないがよ。だって、あたし、自分に才能があるって思えん。

こなつ ……うーん。

ゆうみ 失敗するかも知れんのに、そっちに自分の人生かけれんもん。だからやっぱり、東京行けん。

こなつ ……そうかー。

ゆうみ ……なんか、ごめんなさい……。

こなつ ……失敗するかも知れんのに、自分の人生かけられないかあ。……真面目だなあ。あたしと全然違う。あたし、あんたくらいの時、大分いい加減やったきね。

ゆうみ ……。

こなつ あんた、前、あたしになんで東京に行ったのか聞いたよ。それ、あたし、自分でもよくわからんがよ。なんであんなに東京に行きたかったか。何かがやりたくて東京に行ったわけやないきね。きつと、東京じゃなくてもよかったが。ここじゃなければどこでもよかったがよ。あたしの東京行きなんて完全に失敗よ。あんたのおばあちゃんとは喧嘩するしね。正直、一人暮らしは寂しかったしね。

みはる へえ、意外。

こなつ それでもね、ムキになって出て行ったからね、反対を押し切って。だから絶対に言えんわけよ、寂しいとか、そういう弱音は。なーんか、もう、失敗だったなあって、思っちゃったわ。東京。

ゆうみ ……。

こなつ ここにおる時は東京に出るって楽しいことばかりって思いよったがよ。だから、実際に行ってみて、ようやく、いろんなことに気がついたがよ。それをね、行く前から考えちゆう、あんたは大人やわ。高校生の時のあたしより全然大人。

でもね、大人じゃなかったき、あたし、いろんな経験ができたがで。いま、あんたと二人でなんとかやっていけゆうのは、あの時、一人でいろんなこと乗り切ったからなんよ。だから、後先考えんと知らん世界に飛び込んでいくような、アホみたいな生き方も、結構悪くないがで。

ゆうみ ……。

こなつ あんた、写真撮るが、好きながでね？

ゆうみ ……うん。

こなつ だったら写真撮んなさい。後悔せんように。

ゆうみ ……。

こなつ あたしも、あんたと喋るがは怖かったけど、こうしていま話ができ、思ったことを言えゆう。やき、あんたの気持ちを聞くことができたわね。あたしも、もう、あんたから逃げんき、あんたも自分の気持ちから逃げるのをやめなさい。

あきほ (突然) あー。

こなつ なに。

あきほ ……あぁー。

みはる あきほ、どうした。

あきほ 用事を思い出した。

みはる え、今？

あきほ 今。

こなつ 今、夜だよ。

あきほ 夜だろうが昼だろうが関係ない。

みはる ねえ、いま、親子の大事なシーンなんだけど。

あきほ うん、わかっている。わかっているけど。あたしが思い出したのは、あたしの大事なシーン。

みはる 自分中心！

あきほ じゃ、ごめん、あたしこれで。あ、それから、ゆうみ。

ゆうみ なに？

あきほ ほんと、失うのは一瞬だからね。好きなものを大事にしなさいよ。

ゆうみ う、うん。

あきほ じゃ、ごめん。行ってきます！

明日香の話

あきほ ※あたしは車に乗り込むと、明日香にラインを送りました。

すると、彼女は一人でキャンプにでかけているとの返事がありました。

あたしは彼女のいるキャンプ場へ向かいました。

真っ暗闇の山道をグーグルマップを頼って走ること30分。

頂上近くと思われる場所にそのキャンプ場がありました。

夜のキャンプ場。山頂付近。

明日香がいる。

明日香 先輩。

あきほ 吉村さん。

明日香 本当に来てくれたんですね。

あきほ 来たよ。来た。もう、すごい不安だった。道間違ってたらどうしようって、もう二度と帰れないかもしれないってすごい不安だった！。

明日香 ですよねー。

あきほ でも、来た。なんとか。吉村さんがここにいてよかった。

明日香 いますよ。あたし。

あきほ そうだね。いた。

明日香 とりあえず、コーヒーでも飲みますか。

あきほ うん。

二人、椅子に座る。

明日香はコーヒーの準備。

明日香 お久しぶりですね。

あきほ うん。久しぶりだね。元気にしてた？

明日香 はい、ボチボチです。

あきほ そう。

明日香 このキャンプ場、あたしのとっておきなんです。どうですか。いい感じでしょ。

あきほ 星が綺麗だね。

明日香 いいですよー。でも本当は今の時期より、もっと冬の方が空気が澄んで、もっときれいに見えるですよ。

あきほ 冬のキャンプかあ。きびしそうだなあ。

明日香 雪が積もるような真冬にはいかないですよ。でも、天気がいい時だったら、ストーブたいて、お鍋したり、焚き火でお肉焼いたりして楽しいんです。

あきほ お鍋って一人でやるの。

明日香 一人ですよ。あー、先輩、今あたしのこと寂しいやつって思いました？

あきほ 思っていないよ。思っていない。

明日香 うそー。思いましたよ。……はい、コーヒー。どうぞ。

あきほ ありがとう。

明日香 この、満点の星空を眺めながら、コーヒーを飲むって最高ですよね。

あきほ うん。最高だね。

明日香 先輩。実は、あたし、謝らなくちゃと思ってたんです。

あきほ 謝る？ なにを。

明日香 なんか、先輩に生意気なことを言っちゃって。すいませんでした。

あきほ いや、別に、そんな、生意気なこととか言われたつもりはないし。

明日香 でも、ずっとあたし気にしてたんです。ごめんなさい。

あきほ いやいや、やめて。謝らないで。もういいから。もう、いいから。

明日香 そうですか？

あきほ うん。

明日香 よかった。あたし、あれから、ハローワークに行って、仕事を探し始めました。

あきほ そう。

明日香 失業保険の手続きもして、なんか、職業訓練校ってところに行ったら早めに受給できるらしくて。それも手続きしてきました。

あきほ そうなんだ。

明日香 いつまでも泣いてられないですからね。

あきほ イラスト、描いてるの？

明日香 今はちよっとお休みしてます。すこし時間が経ったら、自分のためにまた描こうと思ってます。

あきほ そっか。あたし、また吉村さんの絵を見たいな。

明日香 そうですか？ だったら、すぐにでも描きはじめようっかな。

あきほ 自分のために描くんじゃないのかよ。

明日香 いいじゃないですか。先輩は特別ですよ。

あきほ ……。

明日香 先輩。あたし、ちよっとだけ、前向きになれました。自分のために、頑張れるって気持ちになってきたがです。だから。先輩、あたしのそばにいてくれますか？

あきほ ……。

明日香 先輩？

あきほ ……あたし、なんつうか、全然ダメだ！。

明日香 え？

あきほ 全然ダメだわ。ダメだー。全然ダメ。

明日香 何がダメなんですか。

あきほ ダメだよ。ダメなんだ。吉村さん、ずっとあたしのこと、褒めてくれてたじゃん。でもね、本当にすごいのは吉村さんの方だよ。あたしじゃないんだ。

明日香 ……あたし、すごいですか？

あきほ だってさ、自分のことがわかってるじゃん。向いてないと思ったら見切りをつけて、次に進む決断力があるじゃん。それで、自分の好きなことを仕事にするか、趣味にするか、客観的に判断できてんじゃないよ。それってさあ、すごいよ。

明日香 ほえー！。

あきほ それだけじゃないよ。……なんつーか。あたし、吉村さんに甘えちゃって。えらそうなこと言っただけ。……それで全部言わせちゃって

さ。

明日香 全部ですか。

あきほ 全部。……もうあたしのセリフなんて残ってないじゃん。

明日香 はあ、すいません。

あきほ ……吉村さん。その、なんと言いますか。あたしも、同じ気持ちなんです。

明日香 同じ気持ちですか？

あきほ その、一緒にいたいって言うか。そういう……やべえ。照れる。

明日香 照れますね。

あきほ だから、全部言わせちゃってごめん。

明日香 いえ……はい。ありがとうございます。

あきほ 吉村さんって。

明日香 なんですか？

あきほ 下の名前って何？

明日香 明日香です。……まさか。知らなかったがですか？

あきほ ……ごめん。知らないままここまできちゃった。

明日香 あ、いきなり下の名前で呼びあたりします？　そういうの、アイドリング無しで急に行けるタイプですか？

あきほ わかんねえー。どうだろうー。吉村さんは行けるタイプ？

明日香 あたし大丈夫ですよ。あきほさん。

あきほ うわー。

明日香 あきほさん、ビールありますよ。どうします？

あきほ あ、だってあたし、車できた。

明日香 この夜道を一人で帰りますか？　帰り道は心細いですよ。

あきほ ……確かに。

明日香 どうします？　あたしの車に冬用ですけどシユラフがもう一枚ありますよ。

あきほ ……じゃ、お言葉に甘えて、今夜はここで泊まっていくか。

明日香 やった。じゃ、早速ビールにしましょう。ちなみに、あきほさんって、こういうキャンプは初めてですか？

あきほ 初めてだね。

明日香 すごい。じゃ、初キャンプはあたしにとってことだ。(ビールを渡して) では、あきほさんの初キャンプに乾杯！
あきほ 乾杯！

みはる ※それで、時間はようやく最初のシーンあたりに戻ってきます。

実家にあきほが仕事の友達を連れてくるからと言って、あたしも誘われてたんですが。

あたしは一人自宅で、ほうじ茶を飲んでいました。

それは、その時、あたしは長旅から帰ってすぐだったからなのです。

あたしがどこに行ってきたのかと言いますと。

昨日の朝。

夫がなにやらガサゴソとやってみました。

なんだろうと思って寝室を出ると、玄関のところで夫の姿を見つけました。

大輔がいる。

ポケットのたくさんついたジャケットを着て、キャップを被り、クーラーボックスを持っている。

みはる ちよつと。

大輔 あ。

みはる ちよつと、あんた。どこにいくの。

大輔 え、いや。あの。

みはる 釣りね。

大輔 え？

みはる 釣り、り、ね。

大輔 違います。

みはる その格好は違います。釣りに行くのね。

大輔 ……。

みはる 一人で行くの？

大輔 ……。

みはる 誰かと行くのね。誰と？

大輔 ……会社の同僚と。

みはる 海？ 川？

大輔 う、海に。

みはる 船に乗るの？

大輔 ……はい。

みはる 乗るのかよ！

大輔 すいません。

みはる 何人？

大輔 7人から8人かな。

みはる 随分と大勢で行くんだな！ それって移動の車内は密じゃないのかよ！

大輔 いや、それは、窓を開けるし。

みはる 窓開けるって、由布院は露天風呂だわ。野外だわ！

大輔 ゆ、由布院？

みはる ねえ、なんであたしの温泉はダメで、大輔の釣りはいいわけ？ ねえ、説明してよ。どういう理屈なの？

大輔 いや……。

みはる あたしがごんだけのこと我慢してると思ってるの？ ねえ、大輔が言うからいろんなこと我慢してんだよ。それなのに、なんで大輔だ

けやりたいことやろうとすんのよ。

大輔 ……ごめん。

みはる ごめんじゃないよ……。そこはごめんじゃないだろ。

大輔 ごめん……。そろそろ時間だから。

みはる ……。

大輔 じゃ、今日の夜には帰るから。

大輔、出ていく。

みはる ※普通、この状況で、出ていきます？

ちよっと、あたしには考えられないですけどね。

とにかく、あたしはそうして一人残されたのです。

とりあえず気持ちを落ち着けるためにほうじ茶をいれました。

ほうじ茶があたしのリラックス法なんです。

(一口すする) はー。

(もう一口すする) ふー。

味がしないですよ、こんなの。

あたしに残された道は一つしかない。

あたしは財布と携帯を持って家を出ると、愛車のタントで高知駅へ向かいました。

コインパーキングに車をとめ、みどりの窓口に入ると

「由布院までの切符をください」と言いました。

高知駅から土讃線の特急で岡山へ、岡山で新幹線に乗り継ぎました。

そこで、朝から何も食べてないことを思い出して……。

きよろきよろと辺りを見る。

みはる

どうも、コロナの影響で車内販売が中止になっているようでした。くっそ、どこに行ってもコロナ、コロナ。

コロナのせいであたしは最低限の食事すらとることができない。

久留米駅で乗り換え、その際にお茶とカロリーメイトをキオスクで買って、ゆふいんの森と書かれた列車に乗り1時間半。

日が暮れる頃、ようやく由布院駅に到着しました。

飛び込みの温泉旅館はすごく高かった。

部屋に通され、温泉に入って、ご飯を食べて、また温泉に入りました。

お湯に浸かりながら、あー、あたし、あれだけ憧れてた由布院にいるんだーって思った。

夫からは電話もかかってこない。しょうがないから夜9時ぐらいにこっちからかけました。

大輔 あ、もしもし？

みはる もしもし？

大輔 ああ、うん。

みはる 魚、釣れた？

大輔 ああ、まあまあ。

みはる あのさ、あたし、今、どこにいると思う？

大輔 どこ？

みはる 由布院。

大輔 え？

みはる 由布院だよ。箱根じゃないよ。

大輔 温泉？

みはる そう。

大輔 そう。よかったじゃん。

みはる ああ……うん。

大輔 いつ帰るの？

みはる 明日かな。

大輔 そう。じゃ、今日の魚、刺身にしたけど、冷凍にしとこうかな。

みはる ああ、うん、そうしなよ。

大輔 じゃ、ごゆっくり。

みはる ああ、うん。

電話切れる。

みはる 夢の由布院だったはずなのにね。よかったじゃん、だって。

あーあ、なんだか温泉までどうでもよくなっちゃいそうだ。

それで、あたしは次の日、観光もせず、朝早く由布院を立って、来た時と同じルートで自宅に帰ったのでした。家には大輔がいた。

いつもと同じように、ソファで、スマホのゲームをやっていた。

あたしがいるのに気がついてないみたいだ。

あたしはほうじ茶を入れて、一人きり。

はー(とため息)

(ほうじ茶をすする)

たかがほうじ茶、されどほうじ茶。

(ほうじ茶をすする)

じゃ、めんどくせえけど、いくか。

仁淀川河畔

みはる あたしが実家のそばにある、仁淀川の河原に着いたのは、バーベキューが終わりに近づいていて、みんないい感じに仕上がってる頃でした。

こなつ、ゆうみ。

あきほと明日香。

こなつ みはるー。おせい。

ゆうみ ほら、はやくはやく。みはるちゃんの分取つといたから。

みはる あー、はいはい。(椅子に座る)

あきほ あ、みはるちゃん、この人、吉村明日香さん。

明日香 お姉さん、あの、吉村明日香です。初めまして。

みはる あ、どうも。初めまして。姉のみはるです。

ゆうみ みはるちゃんきたから、みんなで写真撮ろうー。ほら、集まって。

ゆうみがスマホで写真を撮る。

ゆうみ (写真を見て) いい感じー。あとでラインおくりまーす。

みはる ※そんなこんなで適当にバーベキューをつついて、ビールを飲んで。

なんか、由布院じゃなくて、最初からコッチに来たらよかったかなーと思いつつ。

ゆつくりと日が暮れて、あたしたちは焚き火を囲みました。

焚き火の周りで。

こなつ みはるさあ、あんたに言つとかないといけないことがあるんだけど。

みはる なに。
こなつ あたしとゆうみね、この家を出ます。
みはる え。
こなつ 高知市内に引っ越します。
みはる え、なんで。
こなつ だってその方が便利やん。この子の塾が近くなるし。それに、写真のバイト、一人で行けるようになるでしょう。
みはる マジで！
こなつ あたしも出勤が楽になるしねー。ほんと、引越し楽しみだわー。
みはる じゃ、この家はどうすんの。売るのが？
こなつ 売らない。
みはる どうすんの。……え。まさか。
あきほ あたしが住む。
みはる えー。なんで。
あきほ なんて。経済的な理由？
みはる 経済的な理由……。
こなつ と、いうわけで。新しい家が見つかったら、あたしたちすぐ引っ越しするから。以上、報告おしまい。
みはる えー。……（ゆうみに）じゃ、決めたの、進路。
ゆうみ ちよつと、本気でやってみようかなと思いうう。写真。
みはる おおー。そうかー！ がんばれよー！

明日香。

明日香 ※これでこのお話はだいたい終わりなんですけど。

最後に、この、初めてあきほさんの実家にお邪魔した時、忘れられない出来事が二つあったんで、その二つを聞いていただいで終わりにしたいなと思います。

まず一つは、お姉さんのみはるさんと二人きりでお話したことです。みはるさんはその時、ちよつとだけ酔ってました。

明日香とみはる。

みはる 明日香さんはここ来たの初めて？

明日香 はい。

みはる じゃ、こなっちゃんとゆうみも今日初めて会ったんだ。

明日香 そうですね。

みはる ゆうみ、いい子でしょ。

明日香 はいー。いい子ですね。まだ若くて、夢があつて。そんでお母さんもすごいですよ。ゆうみちゃんのために引越すつて。あたしんち

じゃ考えられないです。

みはる 確かにね。思い切つた決断だよ。

明日香 いいお母さんですよ。こなっさん。

みはる いいお母さんか。こなっちゃんね、ゆうみが黙つて部活辞めた時、本人に直接聞けなくてね。あたしにスパイみたいなことやらせ

たがよ。

明日香 スパイっすか。覆面被つたり？

みはる 被らないよ。……スパイってどんなイメージなの？

明日香 あ、忍者だ。あたし思ったの。……すいません。話し続けてください。

みはる ……。でも、この前、あの二人がゆうみの進路のことで話してるのを見てね、やっぱり母つてすごいなあつて思ったな。あたしんちは子

供いないからさ。なんか、母親つてどこ見せられると、ビックリしちゃうんだよね。

明日香 へえ。

みはる なんか、みんなすごいよね。みんな何かしら変化して、次のステップに進んでる。すごいよ、みんな。コロナ関係ないもん。こんな時

でも、ちゃんと自分のやりたいことをみつけて行動してる。

明日香 そうですね。

みはる だけどさ。あたしだけ何も変わってなくて。そのまま。……あたし。一体なにをどうしたいんだらうね。

明日香 みはるさん？

みはる あたし、今、何もかもうまくいってないんだ。なーんも。

明日香 ……。

みはる 何かやらなくちゃと思って行動しても全然ダメでさ。なんだかさあ。うまくいかないんだよね。なんなんだろうね。あたし、どうやって、もつと満足して生きていけるのかな。

明日香 ……。

みはる なんかがめんね。変なこと言っちゃったかな、あたし。

明日香 ※この話を聞きながら、あたし、公園であきほさんと話をした、あの日の夜を思い出していました。

みはるさんが言ってることって、あたしにも覚えがあるというか。

でも。…何も言えなかった。何か言いたかったんだけど。

あたし、別に、傷を舐め合いたいわけじゃないし。

だけど一人ぼっちは寂しいし。

次の仕事を探さなきゃなんないけど、あてなんかないしね。

(みはるに) みはるさん、あたしもわかんないです。あたし、どうしたらいいんでしょうか。

… (みはるに明日香の声は届いていない)

この、みはるさんが心を許してくれた瞬間が忘れられないことのひとつ。

そしてもう一つは、あきほさんとのことです。

あきほと明日香

あきほ 明日香。

明日香 なんですか？

あきほ ここ、案外いいところでしょ。すぐに河原があるし、バーベキューしたり、焚火したりできるし。

明日香 はい。すごいいいです。ここ。

あきほ あたし、来年からここに住むじゃん。だからさ、よかったら、あんたも一緒に住む？

明日香 え。

あきほ ここで。あたしと。

明日香 えー。

明日香 ※それであたしがなんて答えたかというと。
えへへ。恥ずかしいんで内緒です。

暗転。